

九大薬友合誌

第42号

令和2年1月20日印刷・発行編集 福岡市東区馬出3丁目1番1号 九州大学薬学部内九大薬友会事務局
印刷 小野高速印刷株式会社 大分市松原町2丁目1-6

会長挨拶

九大薬友会会長 家入一郎
(九州大学大学院薬学研究院 研究院長)



薬友会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

平成から令和に元号が変わり、皇室関連の行事が毎日のように報道されています。九州、福岡

に目を向けると、福岡ソフトバンクホークスが3年連続の日本一となり、先日、優勝パレードがありました。また、観光地には、多くの外国人が訪問し、国際化（インバウンド）が間違いなく進んでいることを実感します。一方、九州大学に目を向けますと、箱崎キャンパスが完全に伊都キャンパスへ移転し、過日、お別れの記念行事が催されました。時折、上空からキャンパス跡地を見ると、多くの建物が壊され、平地が目立ってきました。新規の魅力ある開発の早い着手が望まれます。一方、移転を完了し、九州大学全体も落ち着き始めたのでしょうか、馬出地区のテニスコートや福祉施設の改修、若手研究者への研究補助など、良い（珍しい）ことも多い令和元年でした。

令和元年の九大薬学

41号に記載した内容についての続報です。

昨年度、国際コース（創薬学科）を新設しましたが、2年生6名の学部学生に対する英語での講義や実習を開始しました。また、8月に2週間の留学（台北医科大学、陽明大学）を無事済ませ、元気に帰国しました。最終日に訪問する機会がありましたが、報告会での英語によるプレゼンなど、短期間ではありましたが、充実した滞在となったようです。

今年度、薬学教育評価機構による6年制教育カリキュラムの評価を受けました。一部の項目について、改善が必要との指摘を受けましたが、無事、『適合』判定を受けました。詳細は、(http://www.jabpe.or.jp/special/pdf/2018/kouhyo_6.pdf)をご覧ください。

薬学研究院に新分野を創設しました。『グローバルファーマシー分野』で、アカデミア創薬の推進を最大のミッションとしています。そのため、従来の研究を主体とした分野ではなく、学生や教員の意識改革や既存の『システム創薬リサーチ構想』への機能追加を通して、創薬を実現化する役目を有します。教授には国立研究開発法人医薬基盤研究所の近藤裕郷所長にクロスアポイントメント（CA）制度を活用し着任頂きました。近藤教授は九大薬のご出身なので、ご存知の方も多々と思われれます。先生は、塩野義製薬などで多くの医薬品の開発に携わり、抗インフルエンザ薬などを上市されています。創薬については、豊富な経験をお持ちです。その他のスタッフとして、川西英治講師をやはり田辺三菱製薬とのCA制度でお招きしました。先生は、medicinal chemistryを専門とされています。現在、九大薬では、リポジショニングに注目した育薬をアカデミア創薬の一部として推進しています。既存の医薬品を適応症以外の疾患に使用することを目指しますが、一部の化学構造を変化させることで、副作用が少なく、より強力な効果を得ることができます。ここに、経験豊富なmedicinal chemistが加わることで効率化が図れます。一方、新規の化学構造を有する医薬品の卵は、特許で諸権利を守る必要があります。さらに、製薬企業に導出するためにも知財の専門家が必要となります。九州大学にも知財を専門とする組織がありますが、医薬品に特化した知財の専門家が望まれることから、青山特許事務所（大阪市）の高山裕貢弁理士と契約を結び、特許についての講義などを通して、知財の取り扱いについて勉強をしているところです。高山弁理士も九大薬の出身です。このように、アカデミア創薬を推進するための組織強化を図っています。

以上のような九大薬の動きの中で、生命物理化学分野の山田健一教授と生物有機合成化学分野の佐々木茂貴教授がベンチャー企業を立ち上げられました。薬学研究院としても全面的にサポートしたいと思います。

最後に、薬剤師国家試験に触れます。九州大学における薬学部の評価基準の上位に国家試験合格率が挙げられます。そのため、95%以上の合格率が達成された場合は、医（医・看護）歯薬学部を対象に、インセンティブ経費

(研究費)が交付される制度が設けられました。6年制(新卒扱い)と4+2+2制(平成29年度入学者までの過渡的措置)の学生が毎年受験しますが、今年も新卒の合格率は100%で、全体の合格率も高く、全国一位でした。41号でも記載しましたが、臨床薬学教育センター教員の親身な指導の賜物であります、学生も頑張りました。

このように、大学を取り巻く環境は複雑ですが、諸問題に柔軟に対応し、九大薬学が目指す研究、教育を形ある成果とし、人類の健康と福祉に貢献し、その存在を世の中にアピールしていきたいと思っています。

卒業生の皆様へ

馬出キャンパスには、医歯薬看護の4学部・学科が共存しており、共通教育科目、チーム医療、医薬品・医療機器開発について連携・研究できる良好な環境が整備されています。さらに、研究費や研究設備の有効活用を目的とした共同利用システムも構築されています。その中であって教員数の削減、諸業務の加重などの負担が増えているのも事実です。教育や研究の質を維持・向上させるためには、先ほど述べました柔軟な対応が必須となります。時には、組織改革が求められる事もありますが、諸先輩が築き上げた歴史を尊重しながら進めて参りたいと思います。何卒、ご理解とご協力をお願い致します。

最後に

九大薬学では、毎年100名程度の学部卒業生と大学院修士生を輩出しています。活躍の場は、病院薬剤部などの医療系や製薬企業の研究所や開発部門が中心となっています。就活は学生にとっても試練ではありますが、その間、研究活動が停止し、長期に渡ると論文作成にも支障が出てしまいます。なるだけ早く収束するためには諸先輩のお力をお借りする場合もあろうかと思われれます。薬友会の今後、益々の発展を図るとともに、様々なサポートを頂けますよう、今後よろしくお願い致します。

令和元年11月吉日

新任あいさつ



グローバルファーマシー分野
教授 近藤 裕郷

薬友会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。2019年4月に新

設されましたグローバルファーマシー分野の教授に就任いたしました近藤裕郷と申します。現在、私はクロスアポイントメント制度により国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所の医薬基盤研究所長を併任しております。私は1981年に九州大学大学院薬学研究科(兼松頭教授)修士課程を終了後、鐘紡株式会社薬品研究所に入所し医薬品の創薬研究に従事してまいりました。この間、1991年からスクリプス研究所に留学し招聘研究員として複合糖鎖のサイエンスを学びました。1999年のオランダのオルガノン社による経営統合により日本オルガノン社に転籍いたしました。2001年の研究所閉鎖に伴い塩野義製薬株式会社に入社いたしました。同社では研究開発、信頼性保証、グローバルSCMなど主に経営マネジメントに携わってまいりました。また2009年からは8年間に亘り日本薬学会の理事および監事を務めながら日本薬学会の発展に努めてまいりました。そして2016年3月末をもって製薬企業での活動を卒業し、同年4月より医薬基盤研究所に活動の場を移し日本の創薬研究の振興に努めております。2017年からは所外活動の機会を頂き、日本医療研究開発機構(AMED)の事業であります創薬等ライフサイエンス研究支援事業(BINDS)の総括プログラムオフィサーとして日本のライフサイエンスの進展に向けた支援活動に微力ながら関わらせて頂いております。九州大学ではこれまでの35年間に亘る製薬企業での経験を活かしながら、薬学研究院が主体となって取組んでいる創薬研究の支援や研究から生まれた成果の社会実装に向けた活動に取組み、本分野の活動が薬学研究院の目標達成の一助となりますよう頑張っている所存でございます。今後ともご指導ご鞭撻の程、何卒よろしくようお願い申し上げます。

グローバルファーマシー分野
講師 川西 英治



はじめまして。令和元年10月1日付でグローバルファーマシー分野の講師として着任いたしました川西英治と申します(田

辺三菱製薬株式会社とのクロスアポイントメント制度を利用)。私は平成3年3月に富山医科薬科大学(現富山大学)大学院を修了後、同年4月に田辺製薬に入社、以来28年間一貫として有機合成化学を基盤とした創薬研究および研究員の人材育成に従事してきました。創薬研究では降圧薬(アンジオテンシンII受容体拮抗薬)・2型糖尿病治療薬(SGLT2阻害薬)・精神疾患薬(PDE10A

阻害薬)・天然物由来抗腫瘍薬の全合成・人工核酸モノマー合成研究など様々なプロジェクトを担当してきました。主要な成果としては上市品としてブロックバスターにまで成長したINVOKANA[®]・カナグル[®](SGLT2阻害薬)の創製に従事したことであります。

九州大学ではこれまでの創薬研究経験を活かし、ドラッグリポジショニングを進化させ、患者様に貢献できる新しい価値を持った新薬創出のために貢献していきたいと考えております。また世界をリードする研究を推進されております先生方にご助言いただきながら、アカデミア創薬の環境整備を行っていききたいと考えております。さらには製薬企業において実践してきた創薬人材育成を九州大学の若手研究者や学生にも行っていききたいと考えております。九州大学発の創薬そして人材育成に微力ながら尽力させていただき所存でございますので、皆様方のご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

私事ですが、本年6月の福岡への赴任は九州初上陸です。趣味は温泉旅行と車中泊で、毎年家族と群馬県草津温泉にたびたび足を運んでおります。新天地の九州には黒川温泉・由布院温泉・別府温泉をはじめ多くの名湯があると聞きしておりますので休日には少しずつ開拓していこうと思います。私生活のほうでも皆様方のご指導を賜りたくよろしく願います。

定年退職にあたって

九州大学薬学部とともに過ごした平成30年間



生物有機合成化学分野
教授 佐々木 茂 貴

平成元年に初めて前田稔先生とお会いしてから令和元年に退職のご挨拶をすることに改めて年月の流れを感じます。時はベルリンの壁の崩壊、湾岸戦争と激動の時代でしたが、九州大学への赴任は私の人生の大転換でした。世界の出来事はすでに歴史的出来事ですが、個人的な事柄としてはまだ連続している人生の一コマです。当時、前田先生は研究室を主催された直後で脳や癌に対する放射性診断薬開発に取り組んでおられました。研究室では学生さんと一緒にMedicinal ChemistryやOrganometallic Chemistryなどの英語原本を輪読しましたが、低レベルの質問や議論をしてしまっ

て、今思い出すと恥じ入るばかりです。

放射性診断薬研究に触れながら、独自の研究テーマを求めて総説や原著論文を読みあさりしました。現在ではインターネットで簡単に論文検索ができますが、当時は電話にモデムをつないで、ヒュルヒュルと音を立てながら検索しヒットした論文を図書館でコピーするという牧歌的な時代でした。また、様々な学会に参加し関連の研究者に意見を聞くなど繰り返し、徐々に病気の原因となるタンパク質と遺伝子を標的にする病態分子認識化学のイメージが出来上がりました。タンパク質間相互作用を阻害するPPI分子探索を目的にペプチドライブラリーから磁気ビーズを使って検索するスクリーニング法を確立しましたが、製薬企業が一斉にコンビナトリアルケミストリー技術を取り入れる状況を見て、PPI研究は断念することにしました。同じ時期に始めた異常DNAを標的にする研究では「異常遺伝子の化学的修復」という極めて到達困難な課題をテーマにしましたが、結果的に私のライフワークになりました。周囲から「マニアック」と呼ばれたアプローチでしたが、永次史さん(現東北大学教授)らの頑張りがあり、幸運にもDNAクロスリンク分子の発見に繋がり、そのことによって核酸化学の分野で「どこからか湧いてきた」と認知されるようになり、さらには重点領域やCREST分担者となるなど、私の研究人生の大きな転機になりました。

2002年には生物有機合成化学分野として独立させていただくことになり、「ゲノム標的化学」を研究室の命題とすることにしました。すでに始めていた3本鎖DNA研究が谷口陽祐君(現九大准教授)に引き継がれ一気に高いレベルに上がりました。初期から継続していた「DNA修復」研究は「RNA編集」へと具体的目標を変え、鬼塚和光君(現東北大学准教授)によって化学の形になり、今まさに実現間近なところまで来ています。遺伝子異常の原因となる酸化損傷塩基関連に関しては中川治君(現大阪大学特任講師)や淵靖史君(現昭和薬科大学助教)、繰り返しDNA配列認識を目的とする低分子リガンド関連では柴田孝之君(現群馬大学准教授)や井本修平君(現崇城大学准教授)など、スタッフや学生さんの創意工夫により進展し、「ゲノム標的化学」の多方面からのアプローチが可能になりました。専門の常識をよく理解せず、チャレンジかどうかよく分からない素人の発想が、従来になかった化学につながる幸運のもとだったのでないかと感じています。加えて、このような異端児を野放しにする余裕があった時代背景にも大いに感謝しています。

九大薬学部の30年を振り返りますと、大学院重点化と薬学部6年制への移行という大きな変化がありまし

た。最近では運営交付金の減額に伴い教員数が削減され、それにも関わらず大学教育の世界共通化と薬学教育改善のため頻繁なカリキュラム変更への対応に追われています。将来的な心配は大学院学生、特に博士課程学生が減少し、将来の薬学を支える人材育成に暗雲が漂っていることです。薬学部ではこれから数年にわたって若手教員への世代交代が進みます。薬友会会員の皆様とともに、若い世代が築いていく薬学部の輝かしい未来を楽しみに見守っていきたいと思います。



追悼：加藤敬太郎先生を偲んで

九州大学名誉教授 姫野 勝

九州大学名誉教授加藤敬太郎先生は、平成31年3月6日、急性肺線維症でご逝去されました（享年満九十歳、叙位 正四位、叙勲 瑞宝中綬章）。

先生は、昭和28年3月九州大学医学部薬学科をご卒業後、大学院薬学専攻に進学され、昭和30年6月医学部副手、教務員、助手を経て、昭和39年1月から12月までグルグルン酸およびグルクロナイド代謝の生化学的研究のためタフツ大学のW.H. Fishman教授の研究室で研鑽を積まれました。昭和41年3月に薬学部助教授に昇任後、昭和46年11月には生理化学教室の教授に就任されました。

先生の研究は、薬物代謝、生化学、分子生物学および細胞生物学など幅広い領域にわたっており、とりわけ、リソソームタンパク質の精製とそれらのcDNAクローニング、さらに、これらタンパク質の生合成と細胞内局在化機構に関する業績は国際的にも高く評価され、リソソーム形成機構の解明のみならず現在の細胞生物の基礎を築くとともにその発展に多大な貢献を果たされました。また、1970年代当時、ほとんど注目されていなかった細胞内の主要なタンパク質分解機構であるオートファジーの重要性にいち早く着目し、細胞分画法および免疫電顕法などを駆使してオートファゴソームの形成・成熟の基盤的研究成果を次々と発信されるなど、先生の先見性と革新性に満ちた研究成果が現在のオートファジー研究の隆盛につながる基礎を築かれたと言っても過言ではありません。

先生は、昭和63年4月から定年退職される平成4年3月までの2期4年にわたって薬学部長および薬学研究科長を兼任されました。この間、大学院独立専攻医療薬学の創設にも多大な努力を注がれ、その結果、平成4年4月より医療薬学専攻が発足し、現在の6年制薬学教育の基礎を築かれました。また、先生は、日本薬学会、日本生化学会、日本細胞生物学会、日本糖質学会等の理事および評議員を務め、平成3年11月には第44回日本細胞生物学会大会委員長として学術の振興と学会の発展にも貢献されました。

研究室での研究発表会やセミナーの時の先生の態度から、謹厳実直で近寄りがたいとの印象を学生諸君に与えておられたような気がします。しかし、教室旅行の宴会や忘年会では、歌や踊りあるいは恋愛論の講釈等々を披露され、参加者と共に宴会を盛り上げておられましたので、学生諸君の心配は杞憂に終わっていたようです。令和元年5月18日の先生を偲ぶ会には、120名を超える同門の方々が参加して頂き、先生の人望の厚さを改めて認識させられた次第です。

最終講義記念講演会のお知らせ

謹啓

皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

このたび九州大学大学院薬学研究院におきましては、令和2年3月末をもちまして、生物有機合成化学分野の佐々木茂貴先生がご定年となられます。

九州大学はもとより、広く学会や社会への永年の多大なご尽力ご貢献に感謝し、下記の要領で最終講演会を開催いたします。多くの卒業生、在校生、関係各位のご参集をお願いいたします。

謹白

記

最終講義記念講演会

場所：九州大学薬学部第1講堂

日時：令和2年3月13日（金曜日）午後より

佐々木茂貴 生物有機合成化学分野 教授

詳細はHPに掲載中

<http://bioorg.phar.kyushu-u.ac.jp/>

世話人

九州大学薬学部教務委員会

<http://www.phar.kyushu-u.ac.jp/>



以上のように、先生は39年の永きにわたり、九州大学において薬学の研究教育に専念し、多方面にわたる優れた業績を挙げられたのみならず、卓越した識見と先見性に基づいた愛情あふれる指導により、多くの優秀な研究者の育成にご尽力されました。先生のこれまでの慈愛に満ちたご指導に感謝し、心より哀悼の意を表します。



井本泰治名誉教授が瑞宝中綬章を授章

蛋白質創薬学分野（前免疫薬品学分野）
植田 正、阿部 義人

令和元年度春の叙勲で、井本泰治九州大学名誉教授（前免疫薬品学分野教授）が瑞宝中綬章を授章されました。伝達式は5月28日に行われ、皇居にて今上天皇に拝謁されました。

今回の授章は、長年の教育功勞によるものです。井本先生は、世界で最初に酵素のX線結晶解析が行われたニワトリリゾチーム（以下リゾチーム）の触媒部位を化学修飾法により世界で最初に同定されました。1978年、38歳の若さで薬学部の教授（薬品製造工学講座；1992年部局改組により免疫薬品学講座へ名称変更）に就任された後に、堀内、三木九大名誉教授との共同研究で、遺伝子工学技術を蛋白質の構造・機能解析研究に取り入れ、100種類以上の変異型リゾチームを調製し、その半分以上のX線結晶解析構造を研究室で解析しました。今日の構造生物学では、アミノ酸変異蛋白質の構造解析が、なんの抵抗もなく実施されていますが、アミノ酸変異がリゾチームの構造に及ぼす影響に関する地道な研究成果が、その研究基盤の一つとなっています。このように蛋白質工学の発展に寄与され、日本で最初に開催された蛋白質工学の国際学会（Protein Engineering '89、神戸）では、副会長を務められました。また、21世紀になり国家プロジェクトで実施された「タンパク3000プロジェクト」で

は、文科省のプロジェクト推進委員を務められました。

同門会で令和元年秋に井本先生の傘寿の祝いの準備を進めていた矢先の吉報でしたので、10月13日に日航ホテル福岡にて、傘寿のお祝いを重ね、叙勲祝賀会を開催しました。日本各地の産学官で活躍している40名程の同門生が参加しました（記録的な台風19号のため、当日の飛行機が欠航し、東京から約10名が参加できず残念です）。井本先生の退官記念行事以来の50名規模の同門会でしたので、大いに盛り上がったことは言うまでもありません。

末筆ながら、井本先生におかれましては、引き続きご健勝であられますこと、同門会一同祈念しております。

近況報告

第一薬科大学 地域医療薬学センター
教授 窪田 敏夫（43回生）



平成28年3月まで臨床育薬学分野に在籍し、同年4月に第一薬科大学地域医療薬学センターに教授（実務家教員）として着任し、

3年目を迎えました。平成6年に薬剤師国家試験を受験した思い出のある場所に赴任することになりました。第一薬科大学は九州大学と同じ福岡市にあり、薬学部（薬学科定員113名、漢方薬学科定員60名）のみの単科大学です。来年（令和2年）開学60周年を迎え、4月には看護学部（定員80名）が設置されます。ちなみに、大学名は変わりません。

本学では、九州大学在籍時と同じく早期臨床体験、実務実習事前学習、OSCE、実務実習といった実務関連の授業を担当しております。学生の人数の多さに戸惑いましたが、ハード面では、スモールグループディスカッション時に1学年の学生を全て収容可能な広大な実習室があり、調剤棚、クリーンベンチなども十分な台数が整備されていました。現在、一番大変なのはルーブリック評価表などを用いて行う学生のアウトカム評価です。改訂された薬学教育モデルコアカリキュラム（以下、新コアカリ）が5年前に導入され、来年度にはすべての学年が新コアカリとなります。新コアカリではアウトカム評価が重視されており、評価方法の確立、評価のための人材の確保などに頭を悩ませながら奮闘しています。

実務実習においては、九州大学では病院実習はすべて大学病院、薬局実習も基本的に福岡県内で実施できましたが、本学は付属病院を持たないため、すべて学外の病

院での実務実習となります。このため、1回の実習での担当施設は5～10箇所となり、訪問先も九州山口全域と広くなりました。これまでに一番遠かったのは鹿児島県鹿屋市です。早朝に九州新幹線に飛び乗り、鹿児島中央駅で鹿屋市直行バスに乗り換えて、フェリーで垂水港に渡り、学生の実習施設を目指しました。翌日には授業があったため日帰りでしたが、帰りには、垂水フェリー名物の南海うどんを堪能できました。このように労力をかけて施設訪問をしますが、直接、学生と指導薬剤師と直接話すことは、実務実習が円滑に行われているかを知るために必要と強く感じます。

実務実習をはじめとした実務関連の授業は大学だけでなく、薬剤師会、病院薬剤師会との連携が重要であり、これまで以上に様々な学外の会議へ参加する機会も増えました。とくに薬局勤務の先生方と顔を合わす機会も増えましたので、大学と現場をつなぎ、学生教育の質の向上に貢献していきたいと考えております。

西鉄高宮駅から徒歩10分とアクセスが良い大学ですので、機会がありましたらぜひお立ち寄りください。

海外だより

Institute of Neuropathology, Faculty of Medicine, University of Freiburg, Freiburg, Germany

増田 隆博 (55回生)

私は2015年6月よりドイツ南部の環境都市フライブルクにある、フライブルク大学病院Institute of Neuropathologyにおいて博士研究員として研究に従事しています。今回は、ドイツでの研究活動から私生活までこれまでの経験を綴らせていただきます。

フライブルクは、ミュンヘンやベルリンなどと違い、日本人にとってあまり馴染みに無い都市ではないかと思えます。現在の人口は23万人程度と決して大きな町ではありませんが、実はドイツ国内では有名かつ人気のある町で、毎年発表されるドイツ版・住みたい都市ランキングでは常に上位に入ってくる都市です。スイスやフランスまで1時間もあれば行くことができ、比較的温暖でドイツ国内で日照時間が一番長い都市として知られています。また、上記のように環境都市として知られ、太陽光発電や風力発電に加え、自転車や自動車をシェアするシステムをフル活用し、環境に優しい街づくりを市が率先して進めています。治安も良く、夏は川で泳いだりビールを飲んだり、冬は無数に存在するスキー場でウィンタースポーツと、家族と生活する私にとっては非常に住

みやすい街です。また、プロサッカーチームは男子・女子共にブンデスリーガ1部（日本でいうJ1）に属していますので、サッカー好きの私には最高です。役所に提出する書類や息子が学校から持って帰ってくるお知らせ等はすべてドイツ語で、理解するのに時間を要しますが、それも楽しんでやっています。

さて、ここからは研究の話をしようと思います。私は、Marco Prinzラボで、脳内に存在する免疫細胞（主にミクログリア細胞）の発生・維持メカニズムおよび病態発症における役割の解明を目的とし、動物モデルおよびヒト脳組織を使って様々な方向から研究を進めています。特に最近では、単一細胞解析技術を用いて、マウスおよびヒトミクログリア細胞の遺伝子発現プロファイルを単一細胞レベルで解析し、これまで捉えることのできなかった細胞サブタイプ、特に各種病態特異的かつ希少なミクログリアタイプの局在を時間軸また空間軸に分けて同定することができました。九州大学に在職中からミクログリア細胞の研究は行っていましたが、新たにこうした最先端技術を組み合わせることで、これまでと違った方向から研究を進めることができているのは、本研究グループで属する大きなメリットと考えています。また、我々の研究グループは非常に多国籍です。それぞれに違う文化で育ち、行動も考え方もそれぞれ違うので、単純な会話の中にも良い意味での“違和感”を感じることもよくあります。こうした多様性は、研究という領域においては強さを生み、これまでには考え得なかった研究の方向性、またその後の画期的な発見を効率的に生み出しているように感じています。特に、研究進捗報告会での討論は、非常に活発で激しいです。初めの頃は戸惑いましたが、今ではこの雰囲気にも慣れ、毎回“楽しいなあ”と思っています。研究者としては、何よりの幸せですね。

現在のように生活が安定するまでは多少時間がかかりましたが、ドイツ・フライブルクに来て本当に良かったと今は言えます。末筆ではございますが、ドイツで研究生活を始めるにあたり、日本学術振興会（海外特別研究員）から多大なる支援を頂きました。また、かなえ医薬振興財団からもご支援いただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。



ラボメンバーの写真、左から4人目が本人、5人目がボスMarco Prinz教授

支部だより

(関東支部)

副支部長 松野研司 (39回生)

令和の時代を迎え、九大薬友会会員の皆様におかれましては、お健やかに過ごしのことと存じます。関東支部の近況をお知らせするように支部長の柴田重信先生(25回生)から指示がありましたので、僭越ながらご報告いたします。

まずは大変悲しいお知らせをしなければなりません…元九大薬友会関東支部長の星野修先生(8回生)が6月22日にご逝去されました。昨年まで支部会や幹事会に欠かさず出席いただき、関東支部の運営に大所高所からご指導いただいております。おおらかでスケールの大きかったお姿に接することができなくなったことが(個人的にも薬化の大先輩であり、同じ有機化学を専門とする端くれとしても)、悲しくてなりません。支部運営に対するご厚情に心より感謝申し上げますとともに、星野先生のお人柄を偲び深く哀悼の意を表します。

次に関東支部の活動状況を報告いたします。支部長の柴田重信先生は、今年もNHKサイエンスZERO『糖尿病研究で大注目！生命をコントロールする体内時計』にご出演になるなど、ますますご多忙の毎日ですが、支部運営においても陣頭指揮いただいております。関東支部自体は1,000名を超える大所帯となって久しいのですが、毎年5月の恒例行事である関東支部総会には多くの会員の皆様にお越しいただいております。近年は総会幹事のご尽力により100名を超える参加者が続いており、様々なチャンネルでの交流が活発化しています。支部総会においては、1年間の活動報告や会計報告等に加えて、多方面でご活躍の会員諸氏による講演会を開催しています。この講演会は、薬剤師研修センター認定研修会として認められており、受講シールがゲットできることも参加者増に一役買っているようです。

その支部総会の幹事は、『卒業回生ローテーション制』、すなわち毎年の担当幹事を代送りでお願いしています。今年(令和元年)度の関東支部総会@神田・学士会館(5/19)は、(奇しくも平成元年卒)38回生の先輩方(幹事代表：池田信也さんを始め、田中直樹さん、中村文子さん、西野いずみさん、吉田香代さんなど)に幹事をお願いし、107名の方にご参加いただきました。聞くところによりますと38回生の先輩方は、この機会

を活用して(支部総会終了後に)ミニ同窓会を開催されたようで、遠くは福岡や香川在住の方にも関東支部総会に駆けつけていただきました。小職個人的にも、卒業以来ご挨拶できていなかった多数の先輩方にお目にかかれたことは、後輩としても大変嬉しいことでした。来年(令和2)度は、私たち39回生が担当幹事として5/31(日)に開催予定です。斬新な(?)講演内容を予定しておりますので、ぜひ多くの皆様にお越しいただけますよう、心よりお待ち申し上げております。

さらに関東支部は、数年前から橋本光紀先輩(会計監査;13回生)を中心に九州大学東京同窓会(九州大学同窓会連合会)にも参画し、8月下旬頃に開かれるSummer Festaパーティーにも参加しています。東京同窓会も年々盛況になっており、他学部の卒業生との懇親を深める良い機会になっています。特に今年は、薬友会関東支部会に九大東京同窓会の櫻井龍子会長(元最高裁判事)がお見えになりましたが、薬学部の誇りである『結束の強さ』に驚嘆されていました。

以上、関東支部の近況についてご報告いたしました。今後とも、関東支部の活動に対するご理解とご協力を賜りますよう、よろしく願いいたします。機会がありましたら、向山レイ副支部長(15回生)と吉田香代副支部長(38回生)が管理運営されている支部HPも是非ご覧ください。

<http://kyushu-yakuyu-kanto.la.coocan.jp/>

末筆ながら、会員の皆様方のますますのご多幸をお祈りいたしております。



総会幹事の38回生のみなさま

(関西支部)

関西支部 事務局 江頭 啓 (43回生)

薬友会会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。現在、九大薬友会関西支部は設立されてから35年目となりました。会員数は450名で、関西圏の製薬企業、大学、医療機関等において様々な分野、職種で活

躍されています。

関西支部ではホームページの運営、年2回の幹事会、および親睦会を兼ねた年1回の総会を主体とした同窓会活動を行なっています。本年度は、10月4日(金)にガーデンシティクラブ大阪において第35回総会・同窓会を開催させていただき、24名の方にご参加いただきました。

総会では、永繁支部長(21回生)挨拶の後、前年度の活動報告および会計報告、本年度の活動計画および予算案、次期支部役員候補の紹介および承認が行なわれました。そして支部運営費の減少傾向に対する対策として2015年度より開始しております総会案内状送付における電子メールの利用の現状をご報告いたしました。メールでの送付は200通、郵送での配送数は250通となりました。引き続き、総会案内のメールへの移行を進めて参りたいと考えております。役員選出につきましては、新たな役員として、谷之口誠也さんに支部活動に加わっていただいておりますことをご報告し、ご承認いただきました。

総会に続き、毎年恒例の講演会では、山口東京理科大学薬学部薬剤学・製剤学教室教授・牛島健太郎先生にお越しいたいただき、「概日時計分子を活用した育薬 ～時間薬物治療と創薬研究～」というタイトルでご講演いただきました。まず、山口東京理科大学薬学部のご紹介をはじめ、先生のご研究である「個体間および個体内変動要因解析に基づく薬剤学研究」について、お話しいただきました。医薬品の作用(治療効果および有害作用)の程度は患者さんごとに異なるものであり、これらを改善・克服する方法の開発が必要とされています。この個体内変動要因として、体内時計(時計遺伝子)を基盤とする生体システムが着目されています。この体内時計の最先端の研究だけでなく、実際の臨床現場での結果について、詳しくご紹介いただきました。

講演会のあとは、岩崎顧問のご発声・乾杯で懇親会が始まり、牛島先生をはじめ参加者の皆さんにゆっくりご歓談いただきました。懇親会には毎年新入会員をご招待しておりますが、今年度は7名の新入会員の方にご参加いただき、自己紹介を行っていただきました。本年も多くの新入会員にご参加いただき、大変盛り上がりしました。

最後に、関西支部のホームページ(<http://yakuyu.info>)に今年度の総会写真を掲載しております。また、これまでの総会写真や支部便り等も掲載しておりますので、総会・同窓会に参加いただけなかった卒業生のみならず、ぜひともホームページにお立ち寄り下さい。

九大薬友会関西支部では会員相互の親睦の輪を広めるとともに、かつて共に学んだ母校の発展のために、少しでもお役に立てることを願って活動しております。そのために、関西支部会員のみならず、九大薬友会全員の皆

様の一層のご支援を賜りますように、今後ともよろしくお願いたします。

関西支部会員の皆様へのお願い：メールでのご連絡にご賛同いただける方は、関西支部メールアドレス(info@yakuyu.info)までご連絡ください。



(福岡支部)



薬友会福岡支部の令和元年の活動報告

福岡支部長 唐澤博順(19回生 72歳)

九大薬友会の皆様、お元気でお過ごしのことと存じます。福岡支部(よか薬会)は、下記のように活動しましたので、ご報告致します。

総会、講演会、懇親会の開催

日時 令和元年(2019)11月10日(日曜日)11:00～

場所 アークホテルロイヤル福岡天神

報告 家入一郎研究院長

「九大薬学部の近況と今後」

講演 産業医科大学病院 消化器・内分泌外科

教授・副院長 平田 敬治先生

「大腸がんの予防・診断・治療の進歩について」

今年は、飛び入りで女賀信子さんにご挨拶を頂きました。女賀さんは、よか薬会会員で、今年から九州大学女子卒業生の会(松の実会)の会長になられ活動中です。「九州大学女子卒業生の会総会20200202開催」の案内を

して頂きました（写真参照）。

出席者 85名。

この85名の参加者は、よか薬会にとっては近來にない大勢の参加で、気を良くしていますし、それだけ場もおおいに賑わっていただきました。日頃から、役員一人一人が、総会を念頭に置いた活動で実った成果だと、全役員に感謝しております。ありがとうございます。

そこで、このような盛會を再現するためにも、今までの活動を振り返ってみました。

○薬学部学生の招待

これは4年前から続けているもので、若者の参加で場がにぎわった。福岡支部（よか薬会）だけができる、薬友会の紹介の場であり、卒後関東・関西での薬友会へ参加が増えるものと期待している。学生達の進む道の先輩達との交流の場としても期待している。予算が許す範囲で招待を続けて行きたい。

○高齢者の参加を促す。

高齢者は年々参加が少なくなることは否めない、参加しやすい環境づくりを考えた。今までは、土曜夜の総会だった、帰り道が暗く、高齢者には転倒の危険など考えられる。開催日時を変更した。土曜夜から、日曜昼間へ。

○現役薬剤師の参加を促す

現役の薬剤師に提供できるものとして、学術単位認定制度がある、よか薬会から1単位進呈することにこぎつけた。そのための活動として、

- ①学術団体として活動開始（規約改正、事務局の設置）
- ②研修シールの発行
- ③参加費の変更 5,000円⇒3,000円（令和元年より）

世の中、値上げしか知らない中、よか薬会は思い切って、参加費を今年から値下げした。この効果は、意外と大きかったようだ。会員の参加増につながり、同伴参加者などに声かけやすかったなど…

○会員・会員以外の参加（同伴参加）促進

研修シールの発行の周知

リマインダーハガキの活用

日常的に総会参加を話題に、同伴参加を提案

その他

これらの活動に改善を加えながら、来年へと進みたい。

次年度の活動計画素案

総会開催

役員役割交替を計画

参加費値下げに伴う、総会収支決算をみながら、来年の経費節減活動を展開する。

その他



（長崎支部）

長崎支部長 淀 光 昭 (31回生)

九大薬友会会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

長崎支部では、平成30年度の支部総会を平成31年2月16日（土）にJR佐世保駅近くのセントラルホテル佐世保で開催しました。過去5年ほどハウステンボス近くのホテルで行っており、佐世保市中心部での開催は初の試みとなりました。長崎支部には薬剤師として活躍されている会員の割合が多いにもかかわらず、支部総会への参加が少なく、薬剤師をされている会員の参加を増やすことが毎回話題となります。地域の薬剤師会に所属する支部会員のネットワークを利用した参加呼び掛けが必要と考えていますが、まだ具体的な取り組みができておりません。佐世保地区には、長崎地区に次いで薬剤師をしている支部会員が多く、まずは佐世保地区の会員に参加してもらえるのではと期待を込めて佐世保市中心部で支部総会を開催しました。佐世保地区の会員による新たな参加はなく残念でしたが、薬剤師の会員が長崎から初めて参加されるという嬉しいこともありました。支部総会の参加者は前年度の21名から減少し、16名でした。平成30年3月に5名の先生方が長崎国際大学を定年退職

されたことも参加者数減少の要因の一つと考えておりますが、そのうちのお一人、姫野勝先生には福岡から参加していただきました。

支部総会では、報告事項として、平成30年度九大薬友会評議員会報告と会計報告を、また協議事項としては、支部総会への参加者増に向けた取り組みなどを話し合いました。また、支部会員の名簿に関して、平成26年度に薬友会本部に個人情報の請求をして名簿を更新しましたが、それ以来、長崎支部への新入会員の確認ができていないので、今年度は数年ぶりの名簿更新を行う予定です。

総会のあと、九州大学大学院薬学研究院 細胞生物薬学分野 助教 宮内優先生（59回生）に「UDP-グルクロン酸転移酵素を中心とした薬物代謝酵素研究の新たな可能性」の演題で講演いただきました。代謝反応の基本的な内容から、先生が取り組まれているUDP-グルクロン酸転移酵素とシトクロムP450との相互作用に関する非常に興味深い内容で、講演後の質疑応答も活発で講演会は盛況でした。

それに続く懇親会は、姫野先生の乾杯の音頭で始まり、少ないながらも自己紹介や近況報告で盛り上がり、会員相互の親睦の輪が広がったように感じられた懇親会でした。

末筆ながら、会員の皆様の益々のご健勝とご多幸をお祈り申しあげるとともに、長崎支部のさらなる発展へ向けご支援をお願いし、ご挨拶いたします。



(熊本支部)

馬場裕子 (57回生)

九大薬友会会員の皆様、お変わりなく益々ご清栄にてご活躍のこととお慶び申し上げます。

私は学部平成20年卒の馬場裕子（旧姓田淵）と申します。支部長である井本修平先生からのご指名により本稿を執筆させていただきます。恐縮ながら少しだけ自己紹介をさせていただきますと、私は熊本県立済々黌高等学校卒業後、平成16年に九州大学薬学部に入學しまし

た。4年次からの研究室配属では樋口駿先生（当時）の薬物動態学分野研究室にお世話になり、平成22年に修士を修了いたしました。その後、エーザイ株式会社に入社し臨床薬理グループにて医薬品開発に従事いたしました。この間、薬物動態学分野研究室の家入一郎先生にご指導いただき、社会人博士課程を修了、学位を取得いたしました。令和1年、故郷熊本にUターンいたしまして、合同会社SSGメディカルを設立し、調剤薬局（こもれび薬局 熊高正門前）の運営と共に、薬物動態解析に特化した医薬品開発業務受託機関の立ち上げに取り組んでいるところです。

熊本では九州大学全学部での同窓会である「九州大学熊本同窓会」があり、本年も11月9日（土）、ANAクラウンプラザホテル熊本ニュースカイにて第8回九州大学熊本同窓会が開催されました。市民公開講座、総会及び懇親会からなり、市民公開講座では、九州大学人文科学研究院哲学部門准教授のエレン・ヴァン＝フーテム先生を講師として「海外研究者から見た日本古代史の魅力」というテーマで講演いただきました。高校生の参加者も多くみられ盛会となりました。総会では私事ながら本同窓会薬学部理事を拝命いたしました。懇親会には薬学部からは5名の方に、全体では124名にご参加いただきました。バンド演奏やマジックショーなど賑やかな懇親会となりました。この九州大学熊本同窓会は年1回の開催が予定されており、来年は11月7日（土）開催予定となっております。熊本支部会員の皆様には来年もご案内させて頂きたいと思っております。学部を超えて在熊の様々な業種の先輩・後輩との交流を深めることができる良い機会かと思っておりますので多数の方にご参加頂きますようこの場を借りてお願い申し上げます。また、九大熊本同窓会には40歳位までを対象とした「若手の会」も組織されており、活発に活動しています。ご興味のある方は下記連絡先までご連絡いただけますと幸いです。

今後、よりよい支部活動を行っていくためには、同窓生の皆様からのご意見やご指導は欠かせないと思っておりますので、支部活動内容に関してのご要望など下記の連絡先にご連絡いただければ幸いです。最後になりましたが、会員の皆様の今後一層のご健勝とご活躍を心からお祈り申し上げますと共に、九大薬友会熊本支部及び九大熊本同窓会のさらなる発展に向けてご支援とご協力を切にお願ひ申し上げます。

熊本支部連絡先：

〒860-0082 熊本市西区池田4-22-1

崇城大学薬学部 井本修平

電子メール：simoto@ph.sojo-u.ac.jp

(鹿児島支部)

鹿児島支部長 魚住太志 (31回生)

九大薬友会の皆様、お元気でご活躍のこととお慶び申し上げます。

鹿児島支部の会員数は約130名（事務局で把握している会員）で、県内に薬学部や大きな製薬会社もないことから、その多くは病院、保険薬局、行政等に勤務しております。支部の主な活動としては、毎年8月下旬に開催される総会があります。今年は8月25日（日）に開催し、出席者は24名でした。

総会では、最初に7月13日（土）九州大学薬学研究院会議室で開催された評議員会の復命を行いました。例年行っている特別講演は、九州大学薬学部同窓生（31回生）で、鹿児島大学病院糖尿病・内分泌内科医師の堂地ゆかり先生に「糖尿病の内服薬・インスリンについて」という演題で講演していただきました。生活習慣の変化とともに患者が増加している糖尿病について、発症のメカニズムや最新の薬物療法に関し、医師・薬剤師それぞれの視点からの講話でありました。身近なテーマでもあり、多くの質問が出され充実した講演になりました。懇親会では、各自の近況報告等があり、楽しいひと時を過ごすことができました。

来年も8月下旬に開催しますので、多数の参加をお待ちしております。

一方、支部活動とは異なりますが、鹿児島県に在住する九州大学同窓生が参加する学部横断的な交流の場となる「九州大学鹿児島同窓会」の設立総会が、平成30年11月17日（土）鹿児島市で開催され、140名の同窓生が出席しました。薬学部からは5名が出席し、他学部の同窓生と交流を深めました。今年も11月に開催される予定となっております。

今後は薬友会鹿児島支部と「九州大学鹿児島同窓会」が互いに連携を取って、さらに充実した活動ができるようにしていきたいと考えております。



教室だより

薬物動態学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

現在、薬物動態学分野は家入一郎教授、廣田豪准教授、秘書の田元由美子さんに加え、学生26名（社会人博士4名、博士6名、修士7名、学部9名）の計29名が在籍しております。

最近の研究内容としては、実験系では薬物代謝酵素やトランスポーターの個人差要因解明や新規バイオマーカーの同定を目指し、遺伝子多型、エピジェネティクス、microRNAに着目した検討を行っております。解析系では臨床試験、電子カルテデータの解析、文献データを用いたPPK/PD解析に加え、AIに注目した研究に着手し始めました。

また2019年度は、臨床薬学科6年の添野さんや角野さんが日本薬学会九州支部大会、博士4年の柏原さん、博士3年の村木さん、修士2年の小西さん、修士1年の橋本さんは日本臨床薬理学会、修士2年の田尻さんと修士1年の武藤さんが日本薬物動態学会と、それぞれの学会で発表することが予定されており、学外への研究成果の発信も盛んに行っております。

解析ゼミもこれまで通り活動しており、卒業生とのつながりの深さを実感しております。

研究室のメンバーや最近の写真、研究室の業績については薬物動態学分野のホームページにて随時更新しておりますので、ぜひご覧になってください（<http://doutai.phar.kyushu-u.ac.jp/> 参照）。卒業生の皆様、お近くにお越しの際は、ぜひ研究室にお立ち寄りください。

最後になりましたが、皆様のご活躍とご健勝を一同心よりお祈り申し上げます。

臨床育薬学分野

皆様、こんにちは。臨床育薬学分野です。現在の研究室のメンバーは、教員3名（島添隆雄准教授、小林大介講師、助教の川尻雄大）と大学院生3名（社会人博士3名）、学部学生9名（6年生3名、5年生3名、4年生3名）と、人数は少ないものの、少数精鋭でがんばっております。

臨床育薬分野では、臨床現場に密接した研究テーマを幅広く推進しています。現在は、福岡市薬剤師会と共同で行っている節薬バッグ運動に関する研究や、新規抗てんかん薬の血中濃度同時測定法と至適投与法の確立

に関する研究、抗がん薬による有害事象（末梢神経障害・手足症候群など）の発現メカニズム解明と対応策確立のための研究など、多岐にわたる内容を行っています。いずれも、臨床現場で役に立つような研究成果の創出を目標にしております。テーマの詳細や研究業績等はホームページをご参照ください (<http://ikuyaku.phar.kyushu-u.ac.jp/index.html>)。また、臨床現場からのご意見や連携も今後重要なものになります。卒業生の皆様（育薬出身かどうかを問わず）の中で、臨床現場に出て、「こういったことが問題になっている」、「こういった研究をしたいけど、どうやって良いか分からない」などの声がありましたら、お気軽にご連絡いただけますと大変光栄です。卒業生の皆さんやそれぞれのご施設と連携して、新しいものを作り上げていければと思っています。

薬剤師に対する世の中の期待や求めるものが著しく変わり大きくなってきている今日、卒業生の皆様を取り巻く状況も大きく変化していると思います。それぞれにご多忙な日々が続くとは思いますが、ご健康にはご留意の上、各ご施設・各分野での先導的なご活躍を祈念しています。



■ ■ ■ 薬剤学分野 ■ ■ ■

薬剤学分野（旧 製剤設計学分野）の卒業生の皆様には、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

薬剤学研究室は、2005年4月より大戸茂弘教授が着任し、「体内時計の分子機構を基盤にした創薬・育薬研究」とのテーマのもと、日々実験に取り組んでいます。この度、大戸教授が2020年度日本薬学会賞を受賞されることになりました。また2020年12月3日（木）～5日（土）には、第41回日本臨床薬理学会の会長を務め、「臨床薬理に立脚した創薬 育薬 グローバル連携」というテーマを掲げ、研究室一丸となって運営する予定です。

現在、薬剤学研究室は教授の大戸茂弘と特任助教の鶴

田朗人に加え、大学院生博士課程7名、修士課程6名、学部学生9名から構成されています。また、2016年度より発足したグローバルヘルスケア分野の教授小柳悟および准教授松永直哉も、引き続き薬剤学研究室と一丸となり教室運営を行っています。

続いて、メンバーの近況をお知らせします。博士課程3年の吉田優哉は今年10月に開催された「第13回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム」にて優秀発表賞に選ばれ、益々研究に精力的に取り組んでいます。同3年の荻野は、昨年薬剤師免許を取得し、研究室のリーダーとして自身の研究・後輩の指導に取り組み、研究室を牽引しています。さらに、今年11月に開催された「第36回日本薬学会九州支部大会」にて優秀発表者賞に選ばれました。また、博士課程3年の山口（社会人）、博士課程2年の岩野（社会人）、博士課程1年の安河内、橋川（社会人）は研究者としての能力を磨くため日々研究に全力を注ぎながら、研究室の運営に携わっています。創薬科学科修士課程2年の北城、駒形、森は修士論文発表に向けて追い込み中です。修士課程1年の小俣、椎葉、山内は自身の研究に加え、研究室行事の企画・運営と、充実した毎日を過ごしています。山内は、荻野と同じく「第36回日本薬学会九州支部大会」にて優秀発表者賞に選ばれております。創薬科学科4年の金谷、北川、白石は自身のテーマが決まり、先輩方の指導のもと卒業論文に向け取り組んでいます。臨床薬学科6年の糸山、田尻は11月末には卒業論文発表、3月には国家試験と多忙な中研究を行っています。臨床薬学科5年の谷尾、趙は病院実習・薬局実習で研修中です。臨床薬学科4年の谷原、正門は講義・共用試験等で必死に勉学に励んでいます。

各々がそれぞれの研究テーマを持ち、日々奮闘している一方で様々な行事にも積極的に参加しております。2019年度の学内テニス大会では予選突破を果たし、決勝トーナメントに向けて鍛錬しております。また、教室内の行事では4月に大戸茂弘教授の還暦祝いが催され卒業生との交流の場もあり、8月の講座旅行と、「よく学び、よく遊ぶ」という精神の元、日々の生活にメリハリをつけることで質の高い研究活動につなげています。

これからも「薬剤学教室」の伝統を継承しつつ、創薬・育薬の観点から新しい研究分野の開拓に邁進して参ります。卒業生の皆様も近くにお越しの際には是非気軽に当研究室にお立ち寄りください。また、当研究室のホームページを随時更新しておりますので是非ご覧ください (<http://yakuzai.phar.kyushu-u.ac.jp/>)。

最後になりましたが、皆様の益々のご健康とご活躍をお祈りいたします。



■ ■ ■ 薬効安全性学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

現在、薬効安全性学分野は黒瀬等教授、仲矢道雄准教授、長坂明臣助教のスタッフ3名に加え、学生13名（博士1名、修士6名、学部生6名）の計16名が在籍しており、心疾患、死細胞の貪食、組織の線維化など様々な研究テーマに向けて日々実験に取り組んでおります。

黒瀬教授は講義や学会などでご多忙な日々が続いておりますが、ミーティング等を通して学生に研究や発表への助言などコミュニケーションを大切にくださります。仲矢准教授はご多忙な中でも、学生を熱心に指導してくださり、研究室を力強く引っ張ってくださっております。長坂助教は、ご自身の実験をこなしながら、学生の指導など様々なことにご尽力してくださっております。また、平成30年から秘書として前原さんがサポートしてくださっております。

博士1年の堀井さんは、論文作成と多くの実験をこなしながら、後輩に対して懇切に指導してくださっております。修士2年の上野さん、廣中さん、盛永さんは、進路も決まり、より一層研究に取り組んでいます。学部6年の那須さん、間恵さんも進路が決まり、国家試験に向けた勉強と研究を頑張っています。修士1年の有門、荻野、吉村は幹事学年の仕事をこなしながら、各自の研究テーマの解明に向けて日々実験に励んでいます。学部5年の江角は、実習に励む傍ら、研究にも取り組んでおります。最後に学部4年は、創薬の笠井、山内、吉木の3人で、3人とも無事に院試を終え、真摯に実験を学びつつ自分たちのテーマに取り組んでおります。以上、少数精鋭で世界トップレベルの研究を目指し日々頑張っています。卒業生の皆様方、お近くにお越しの際は研究室まで是非お立ち寄り下さい。研究室のメンバーや業績などの情報はホームページを是非ご覧ください。

皆様の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。



■ ■ ■ 蛋白質創薬学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様いかがお過ごしでしょうか。

現在、蛋白質創薬学分野は総勢20名で、日々研究活動に勤しんでおります。早速ですが、当研究室のメンバー紹介と近況報告をさせていただきます。

植田教授は、相変わらずのご多忙のなか、実験報告会やセミナーでは学生一人一人と熱心に向きあってくださり、研究に関する的確な助言を頂いております。また、ビアガーデンや講座旅行などの行事では、学生とのコミュニケーションをととても大事にくださっています。

阿部准教授は、明るく優しく、時には厳しく、熱意あふれるご指導で学生を日々叱咤激励してくださっています。

高橋助教は、学生との距離が近く、実験に対するアドバイスを気軽に教えて頂いています。また、研究室対抗のソフトボール大会にも参加して頂きました。今年は、先生のご活躍により、見事準優勝を果たすことができました。

M2・B6の学生は現在、それぞれ修士論文・卒業論文に向けて、昼夜土日を問わず、実験に明け暮れている日々を送っています。M1・B5の学生は自身の実験だけでなく、幹事学年として研究室運営を皆で協力しておこなっています。また、最近はインターンシップなどを通じて、就職に向けての準備もおこなっています。B4創薬の学生は大学院入試に無事合格を果たし、大学院生として相応しくなるために、論文を読んで、知識を蓄え、それを実験に生かして頑張っています。B4臨床の学生も授業やテストで忙しい中、時間を見つけて、少しでも実験を進めようと奮闘しています。

現在、当研究室では、抗体、アミロイド、DNA複製系など様々なタンパク質の立体構造を基盤とした生命現象の解明から医薬品への応用へと、多岐に渡る研究をさらに発展させようと研究室一同意気込んでおります。卒業生の諸先輩方、近くにお越しの際にはぜひ研究室にお

立ち寄りいただき、叱咤激励していただけたらと存じます。最後になりましたが、皆様のますますのご発展をお祈り申し上げます。



■ ■ ■ 病態生理学分野 ■ ■ ■

病態生理学分野は准教授・野田百美の下に修士生2名、学部学生4名（創薬コース1名、臨床コース2名）が在籍しています。また、2019年1月から、本学の卒業生であり、現在、韓国 慶北大学 脳科学研究所・研究教授の中村美智子さんが訪問研究員として来られています。ご主人の張一成（ジャン イルソン）教授は同大学の歯科薬理学教授で、九州大学医学系研究科・耳鼻科の客員教授となっておられ、ご夫婦仲良く電気生理の実験をされておられます。医学系研究院の名誉教授・赤池紀生先生とも共同研究が始まり、時々いらっしゃるので、大先輩の叱咤激励や面白い昔話に笑いが絶えません。さらに10月から半年間、研究生として、中国から那淋（ナリン）君が加わりました。

本年の当研究室のイベントとしては、8月31日－9月1日に第9回日本分子状水素医学生物学会を西鉄グランドホテルで開催し、当学会としては初めての市民公開講座を9月1日に行いました。

当分野の研究領域の一つ、内分泌－グリア関連の分野では、甲状腺ホルモンと脳内環境について研究しており、3月に沖縄で開催された国際生物医科学大会では、修士生の新山哲士君がポスター賞を、野田がKeynote Presentationの受賞をいたしました。昨年に続き、スロベニアのリュブリャナ大学との二国間交流事業で双方の研究者交流を行うと共に、修士2年の新山哲士君は今年も9－11月の2ヶ月間、リュブリャナ大学で研究を行ってきました。

医療ガス・水素に関しては、野田は国際分子状水素医学生物学会で副理事長を務めており、ロシア・ヴォロネジ医大には日露水素医学研究センターが発足し、野田が日本側代表を務めています。本学とヴォロネジ医大は昨

年末、学術協定・学生交流協定を締結しましたので、修士1年の青井孝介君が九州大学海外留学支援事業に採用され、11月から3ヶ月間、留学しております。

教育活動は、本学のみならず、本年は中国・西安交通大学で大学院集中講義を行いました。これまでもいくつかの大学を見てきましたが、中国のトップクラスの大学はキャンパスや建物が立派で施設が整っており、学生の質も高く、のんびりしていると日本は追い越されてしまうと感じます。週末も講義・セミナーがあり、殆ど休みがない状態であるのには驚きました。

卒業生の皆さま、ホームページをご覧になるだけでなく、お近くにお立ち寄りの際は、どうぞお気軽にお越しください。



2019年卒業式前のランチ会



第21回薬学研究者若手セミナー・懇親会にて

■ ■ ■ 分子生物薬学分野 ■ ■ ■

分子生物薬学分野はモデル生物として大腸菌、カウロバクターそして酵母を用いてゲノムDNA複製の開始反応や制御システム、また複製終結点の細胞内局在制御などの分子メカニズムの解析を行っています。

大腸菌を愛してやまない片山勉教授を筆頭に、尾崎省吾准教授、永田麻梨子助教の三名が学生に手厚い指導により、日々研鑽を重ねております。現在は創薬科学専攻修士2年の三善、林、栗原、盧、修士1年の若杉、村岡、商、李、吉田（筆者）、薬学部4年の轟木、興柁、中村、臨床薬学科6年の横山、5年の山口、4年の辰本、研究生の王、そして研究補佐員である吉富祥子さんの計20名で研究活動を行っています。博士課程の学生不在の年

ではありますが、意欲あふれる若人の活力が溢れる研究室です。

今年は大腸菌のヘリカーゼ複合体DnaB-DnaCの構造や、DnaA 活性化因子DARSの複合体中でのDnaA 間相互作用、新規の染色体分配因子CrfCの局在制御、さらには酵母の複製開始複合体の一本鎖DNA結合などに関する重要な4報の報告を行いました。学会活動も精力的に参加し、当分野の研究活動を発信するとともに、他研究室との交流を深め、有意義な議論を交わしました。

2006年から続く西風塾は今年度も開催されました。研究体験コースでは好奇心旺盛な6名の学生を受け入れ、指導する我々にとっても学びの多い経験となりました。九重での研究合宿では、各学生がこれまでに行ってきた研究成果を報告しあい学生同士の積極的な議論が飛び交う場となりました。

今年度の講座旅行は志賀島の海へ出向き海水浴をしました。きれいな海をバックに行ったBBQは最高でした。

昨年度まで指導してくださっていた川上広宣助教は、山口東京理科大学薬学部の准教授として栄転されました。新天地におかれましても、益々のご活躍を祈念しております。

我々は科学の発展に貢献するべく今後とも精進して参ります。研究室一同先輩方のますますのご活躍とご発展をお祈りしています。



■ ■ ■ 創薬ケミカルバイオロジー分野 ■ ■ ■

卒業生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。現在、創ケミでは王子田教授のもと、総勢23名で日々、ケミカルバイオロジー研究に励んでいます。今現在、創ケミでは大きく2つのグループに分かれて研究を進めています。1つのグループは、 β 酸化などの細胞代謝を可視化する蛍光プローブの開発を行っている“プローブ組”、もう1つのグループはコバレントドラッグ創薬に取り組み“コバレント組”です。

今年の創ケミの話題は、なんとといっても進藤助教、淵

田さん、佐藤さんらのコバレントドラッグ研究の論文が*Nature Chemical Biology*に掲載されたことです。また、リアクティブタグ研究を行う、いわゆる“タグ組”は、今はもうありませんが、グループを率いていた田畑元助教らによるタンパク質の電子顕微鏡可視化研究の論文が、ついに*iScience*にアクセプトされました。一方で今年から創ケミは、今年度より新設されたグローバルファーマシー分野（近藤 裕郷教授、川西 英治講師）と連携して、アカデミ創薬にさらに力を入れています。すでにグリーンファルマ研究所5階にある創ケミの別室では、臨床薬学科の学生をメンバーとする創薬プロジェクトが進行中です。

話は変わりまして、今年の講座旅行は長崎に行きました。今回は例年と一味違い、三菱重工の史料館を見学したり、フェリーで池島に渡り炭鉱体験ツアーに参加したりしました。気分が昂ぶった学部4年生がフェリー乗船中に突然熱唱したり、夜に池島を肝だめし感覚で散策したりするなど、とても楽しく充実した講座旅行になりました。講座旅行以外にも恒例の薬学部中庭でのBBQなどの行事もたくさんあり、研究以外でも充実した生活を送っています。

最後になりましたが、卒業生の皆さま、お近くにお越しの際は気軽に研究室にお立ち寄り下さい。皆様の今後のますますのご活躍とご健闘を祈っております。



■ ■ ■ 環境調和創薬化学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。2010年より始動した当研究室ですが今年で節目となる10周年を迎えました。大嶋教授を筆頭に、教員・スタッフ4名、博士課程5名、修士課程8名、学部生9名、研究生1名の総勢27名となっております。当分野では、環境調和型触媒反応の開発・不活性官能基の活性化・生物活性化化合物の合成を軸に研究を行っています。学会発表や執筆活動も活発に行い、先輩方から引き継いだ成果が着実に形となってきています。

さて続いて研究室の近況を述べさせていただきます。大嶋教授は講義や出張など多忙を極める中、当研究室のリーダーとして指針を示すことはもちろん薬学部全体の運営にも尽力されております。森本講師はまるでパンダのように穏やかな面持ちで、豊富な知識を存分にご教授くださります。背中で語る矢崎助教は次々と継続して新しいテーマを創出してくださります。秘書の有村さんは、お母さんのようにふんわりと包み込んでくださる貴重な存在です。

一方、学生は皆で協力し、切磋琢磨しながら研究生活を送っています。D3の米寄は愛すべき最上級生として研究をリードしております。D1の近藤、田中は鋭く率直な意見で後輩の育成に尽力されております。最大勢力であるM2・B6の田淵、橋口、松本、宮崎、蔵園、平澤は心身ともに幅を利かせております。M1・B5の門田、辻、平山、磯貝、吉田は研究室の中心的な存在として、日々活躍しております。B4の江崎、草川、澤村、池田、堀内、研究生の劉と今年度も多くのフレッシュなメンバーが加わり、活気にあふれております。

以上、簡単ではございますが、環境調和創薬化学分野の近況を報告させていただきました。最後になりますが、卒業生の皆様も近くにお越しの際には、研究室までお気軽に足をお運びください。



■ ■ ■ 生薬学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆さま、いかがお過ごしでしょうか。

皆さまのお手元に届くころにはまた季節も移り変わっていると思われそうですが、現在は11月。数日前に2019年最後と思われる薬草園掃除を終え、本格的に冬の訪れを感じています。

現在、生薬学分野には、森元聡教授、坂元政一助教、そして総勢14名の学生が在籍しております。毎年このことからタイからの短期留学生も2人ほど。昨年と比較するとかなり学生が増えた印象で、実験台と機器の渋滞が日常的に発生しています。現在は主に、植物成分の迅

速かつ簡便な測定法の確立や、アレロパシーに関する研究、植物の育種に関する研究などに取り組んでいます。

それでは、簡単に今年度の学生を紹介いたします。昨年度秋にタイから来日し今年度4月よりD1となったNuttさんは、毎日遅くまで実験をしており隔週のセミナーで報告される膨大なデータ量に驚くばかりです。博士課程薬剤師コースに進学したD1の森田さんは、自身の勉強をしつつ、後輩への技術指導を下されています。M2の内山さん、杉山さん、松浦さんは修論に向け、いよいよ研究も大詰めです。忙しい中、私たち後輩の実験内容にも気を配ってくださり多くの助言をいただいています。B6の山口さんは卒論発表と卒試、そして国試を控えており、毎日PCや教科書と真剣に向き合っています。オーストラリアへの9ヵ月間の語学留学から帰国し4月から研究室に復帰したM1（学部入学年度の同期はM2）の南さんは昨年培った英語力を生かし、率先して留学生とコミュニケーションをとっています。M1の越智、森保、B5の堀川は、幹事学年として日程調整等細々とした仕事をこなしつつ、日々実験を行っています。B4は紅一点ならぬ黒一点？ 井上、淵上、田山の女子3人に対して唯一の男子、古瀬。彼はM2男子の内山さん、松浦さんにとっても可愛がられています。

以上、今年度の生薬学分野のご報告でした。末筆ながら、皆様の益々のご多幸とご活躍をお祈りいたします。

■ ■ ■ 細胞生物薬学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、お変わりなくお過ごしでしょうか？

細胞生物薬学分野で助教を務めております、宮内と申します。早速ですが当研究室の近況報告をさせていただきます。

大きな変化として、分子衛生薬学分野と合流し一つの研究室になりました。ご存知の方も多いかと思いますが、当研究室の前身である生理化学教室は、分子衛生薬学分野の前身である衛生裁判化学教室から暖簾分けしたという歴史があります。つまり数十年の時を経て再度同じ屋根の下に集まった次第です。

田中教授、石井准教授は講義や研究の指導に余念がありません。廣田助教、藤本助教は合流後迎える初の学生実習に向け着々と準備を進めています。学生数も一気に多くなり、特に国際色豊かになりました。中国やイスラエル、ホンジュラスと留学生が増え、研究室内で語学力の上達が期待できるようになりました。それぞれ培ってきた知恵や技術を共有し、切磋琢磨することで新しい細胞生物薬学分野を盛りあげていきたいと思っています。

生理化学と衛生化学・裁判化学の同門会も一つになり

ました。両分野の卒業生の方々におかれましては、これまでと変わりなく、気軽にお立ち寄りください。

最後になりましたが皆様の御繁栄をお祈りすると共に、今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



2019年3月 卒業式（細胞生物薬学分野）



2019年3月 卒業式（分子衛生薬学分野）

生命物理化学分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

生命物理化学分野では、山田健一教授をはじめとする先生方の御指導の下、酸化脂質の解析方法の探索、疾患への関与や機序の解明、ターゲット分子への有効な化合物発見のために日々研究に励んでいます。

山田教授、松岡助教授は学会をはじめ、多くのスケジュールで大変ご多忙ながら、私たち学生とのセミナーやディスカッションを大切にしてください。

テクニカルスタッフの加藤さんは学生への技術面でのサポートを親切にしてください。秘書の菱山さんからは研究生活の中で様々な手助けをいただいております。

研究室のメンバー紹介です。D4の日下部さんは博論執筆と並行して実験を行い、また後輩へ手厚い御指導をしてください。薬剤師ドクターコースの多田さん、北島さんは薬局・病院実習に取り組んでいます。M2の

阿部（雅）さん、石田さん、齋藤さん、廣石さんは修論に向け研究活動に精力的に取り組んでいます。6年の森さんは卒論作成と、いよいよと迫る国家試験にむけ頑張っています。5年酒井、M1阿部（真）、有働、山内は実験や研究室行事の企画を行っています。4年の岩尾、齋元、佐川、城臺、中は先輩にも負けず実験に取り組んでいます。

今年、当分野のホームページがリニューアルしました。デザインが新しくなり、近況なども載せておりますので、よろしければご覧ください。

卒業生の皆様におかれましては、御多忙な日々をお過ごしのことと存じますが、近くにお越しの際は是非研究室にお立ち寄りください。



創薬育薬産学官連携分野

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。私たち創薬育薬産学官連携分野は浜瀬健司教授の指導のもと、キラルアミノ酸関連化合物分析を切り口とする創薬の展開や早期診断法の開発を行っています。また、産学官連携研究による機能性食品や化粧品の開発など幅広い研究に取り組んでいます。

本分野は今年9月に国際会議The 4th International Conference of D-Amino Acid Research (IDAR2019)を東京ミッドタウンにて開催いたしました。皆様のお力添えにより、IDAR2019は盛会のうちに無事終了いたしました。ご協力いただいた参加者様及び企業の皆様に厚く御礼申し上げます。また、今後も国際会議HPLC2019 Kyotoや国際会議PBA2020等、様々な学会の主催を予定しております。

次に研究室のメンバーをご紹介します。教授である浜瀬先生、助教の秋田先生、中園先生、秘書の北田さん、薬剤師Dの植木さん、D2の石井さん、D1の謝さん・古庄さん、研究生のKarinaさん、M2の田中さん・吉岡さん、B6の佐藤根さん・二井屋田さん、M1の植木さん・堀田さん、B5の岩崎さん・田川さんに今年度からB4の

梶原さん・瀧澤さん・守永さん・山崎さんが加わり、総勢21名で研究に励んでおります。

浜瀬先生は今年も国内外を問わず奔走されており、ご多忙な日々を過ごされております。そんな先生率いる当研究室は、台湾やタイ、マレーシアなど多様な国へ研修に行く機会を多くいただいているほか、世界各国から常に複数名の留学生を受け入れており、日常的に英語が飛び交う国際色に富んだ研究室となっています。留学生達は上記メンバー21名と日々協力して学び、研究に取り組んでいます。

最近の話題といたしましては、D2の石井さんが九州大学女性優秀研究者賞を受賞され、さらに国際会議IAMPS35にてOral Presentation Awardを受賞しました。また、D1の古庄さんが国際会議HPLC2019にてBest Poster Awardを、謝さんが国際会議IDAR2019にてBest Presentation Awardを受賞するなど、本年も沢山の賞を獲得されています。詳しくは当分野のホームページ (<http://soyaku.phar.kyushu-u.ac.jp/>) をご覧ください。以上を持ちまして本分野の紹介とさせていただきます。ご多忙とは存じますが、近くにお越しの際はぜひお立ち寄りください。

■ ■ ■ ライフイノベーション分野 ■ ■ ■

暮秋というにふさわしい気候となつてまいりました。卒業生の皆様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

ライフイノベーション分野は今年の6月に、めでたく創立5周年を迎えました。当研究室では、津田教授、齊藤准教授、白鳥助教のご指導の下、チーム一丸となって日々熱心に研究に励んでおります。高露助教は、6月よりカナダ・カルガリー大学へ留学され、さらに研鑽を積んでいらっしゃいます。また、本年度4月よりポスドクの高賀博士が特任助教に着任され、学生の指導にご尽力されています。秘書の末宗さん、福迫さんは、いつもみんなを温かくサポートして下さっています。

現在当研究室は、上記7名の教員・スタッフに加え、博士課程6名、修士課程7名、学部生5名で、グリーンファルマ研究所にて日々実験に打ち込んでいます。博士課程の河野さん、兼久さん、大野さん、吉原さんは、中心となつてみんなを引っ張っていく、心強い存在です。修士2年の岡田さん、山方さん、渡邊さんは企業への就職が、笹木さんは薬剤師免許取得コースへの進学が決まり、修士論文発表に向けて精力的に実験をされています。学士6年の松川さんも就職先が決まり、国試勉強に励んでおられます。修士1年の藤井、百木野、吉川は、

来たる就職活動に備えつつ、日々実験を進めています。学士4年の川邊、白石、白坂は来年度より修士課程に進むことが決まっており、学士4年の武田とともに、今後当研究室をさらに活気づけてくれることが期待されます。そして本年度より博士課程に医学研究院麻酔科から石橋さんが来られました。社会人博士課程の鮎川さんも含め、総勢25名で楽しい研究室生活を送っています。

今後も感覚異常（疼痛と搔痒）のメカニズム解明、そして新たな治療薬開発につながるターゲットの発見に向けて研究を続けていく所存です。

諸先輩方、お近くへお越しの際には、ぜひ当研究室へお立ち寄りください。



■ ■ ■ 生物有機合成化学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。当研究室は現在、学生14名、教員4名、技術補佐員3名の総勢21名で日々研究に励んでおります。先頃原田特任助教、技術補佐員の林さんが退職され、新たに技術補佐員として副島さん、中島さん、矢野さん、中国より研究員として劉さんが来られました。また、タイからの短期留学生1名を迎え入れております。

佐々木教授は多忙な日々を過ごされており、最近も学会で全国を飛び回っておられますが、その合間をぬって積極的に学生とディスカッションをされています。谷口准教授はご多忙のなか学生に気さくに話しかけてくださり、研究に関して様々な助言をくださいます。麻生准教授はご自分も夜遅くまで実験をしながら、丁寧に学生を指導されています。阿部助教は研究に加えて研究室の事務を一手に引き受けられ、ご家庭では育児もこなすなど奮闘されています。技術補佐員の副島さん、中島さん、矢野さんは主に機能性核酸の研究補助をされています。

3本鎖グループはM2小薄とM1納富が3本鎖中のTA・CG塩基対認識を目指した人工核酸について研究しています。酸化損傷グループは、M2甲斐が8-nitro-

dG捕捉分子、D2石、M2丸山、B4石川が8-oxo-dG誘導体、M1長田、B4桜田が8-oxo-dG検出可能な人工塩基について研究しております。機能性核酸グループはM1宮本がRNA糖部修飾、B4都甲は塩基部修飾について研究しております。DNA結合分子グループは、B5金城、研究員の劉さんがタンパク質の蛍光検出について研究しております。D2野口、D1相良は薬剤師になるため勉強に励んでいます。

また、今年度をもちまして佐々木教授が定年退職されます。最終講義が来年3月13日に行われますので、卒業生の皆様もどうぞご参加ください。詳しくは研究室のHPをご覧ください。

末筆ではございますが、皆様のますますのご活躍とご健康を心よりお祈り申し上げます。来福の際にはお気軽に研究室にお立ち寄りください。



■ ■ ■ 薬物分子設計学分野 ■ ■ ■

薬物分子設計学分野の卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。博士課程2年の小野と申します。我々の研究室では平井教授のもと、新規生理活性分子の創出に向けた研究を行っております。

昨年まで在籍されていた臼井助教、森田特任助教がそれぞれ栄転されたことに伴い、新しく寄立助教と鳥越特任助教を迎え総員24人のメンバーで2019年度の研究室がスタートいたしました。

平井教授は学会や講義等でご多忙な毎日を過ごされている中で、我々学生に優しく、時には厳しく実験のアドバイスをして頂いてくれます。寄立助教は自身で新規テーマを立ち上げ、毎日朝早くから精力的に実験をこなされているだけでなく、学生への指導も熱心にして頂いております。鳥越特任助教はもうすぐ産休に入られる身でありながら仕事をこなされており、学生へのサポートにも尽力頂いております。

さて、学生を簡単に紹介いたします。D2木室君は日

夜を問わずバリバリ実験をこなすだけでなく、最上級生として研究室を引っ張っている存在です。D1木谷君は万有福岡シンポジウムで賞を受賞し、これからのさらなる活躍が期待されます。M2の上菌君、日高君、丸野君、水野君、森田君はもうすぐに迫っている修士論文発表に向けて追い込みの最中です。M1の織田君、郭君、竹田君、土井君、森山君は実験だけでなく、飲み会等のイベントの両方で研究室を大いに盛り上げてくれています。臨床B5の大野さん、藤井さん、水上君は現在実習で大忙しです。創薬B4の水井君、安富君、山口君は院試を非常に優秀な成績で突破し、実験のウデも日々向上しています。臨床B4の稲田さん、大庭君は講義の合間を縫って地道に実験に取り組んでいます。

平井教授が着任されて4年目にはいりました。「5年後から同窓会を盛大にやるぞ!」とのお達しですので、当研究室で平井教授とご縁がございました卒業生の方々はご参加いただければ幸いです。

末筆ながら、卒業生の皆様の益々のご活躍とご健康を心よりお祈り致します。来福の際は、是非お気軽に研究室にお立ち寄りください。



■ ■ ■ 医薬細胞生化学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。研究室の近況を修士1年の松村がご報告させていただきます。当分野では、藤田教授、杉本助教、吉田助教のご指導の下、「染色体機能制御の分子機構解明とその制がん研究への応用」のテーマの元で、日々研究に励んでいます。

それでは簡単に研究室のメンバーの紹介をさせていただきます。藤田教授、杉本助教、吉田助教、D3が1名、D2が1名、D1が1名、M2が3名、B6が1名、M1が3名、B5が2名、B4が5名の総勢20名です。D3の比嘉さん(DC2)は研究を進めつつ、博士論文と投稿論文の執筆にも励んでいます。D2の高藤さん(DC1)は実験に就職活動にとっても忙しそうです。また、今年からD1(社

会人博士)として、嘉山さんが再び研究室に所属することになりました。M2の藤田さん、松田さん、そしてB6の三小田さんは全員無事に就職先も決まり、現在は修論、卒論作成に向けて追い込み中です。同じくM2の藤山さんは博士課程への進学を志し、新テーマの元、精力的に実験に取り組んでいます。M1の末國、辻田、松村、そしてB5の筒井は、自分の実験をこなしつつも、着実に就職活動に向けた準備を進めています。B5の森は、薬局実習を終え、現在は病院実習に毎日励んでおります。B4は上田、内堀、成松、藤井、松岡の5人で、現在は研究室での生活にも慣れた様子で、自分の実験を一生懸命こなしています。

研究だけでなく、薬学ソフトボール大会に参加したり、集まったメンバーで飲みに出たりと充実した研究室生活を送っています。また、夏には講座旅行で大分の耶馬溪を訪れ、自然と触れ合い、日々の疲れをリフレッシュすることが出来ました。

私たちは今後とも研究に、日々精進していく所存です。これからも当研究室をよろしく願いいたします。

■ ■ ■ グローバルヘルスケア分野 ■ ■ ■

The second full year of the department of Global Healthcare has ended with great news. The evaluation of Assistant Professor Yamashita was favorably considered by the Faculty of Pharmaceutical Sciences. These are fantastic news for Dr. Yamashita, and for the continuous involvement of our department in the education and research activities of this Faculty. In this sense, we have intensified our educational activities, such as the training of researchers interested in the discovery of compounds with potential pharmacological effects. In addition, we intensively support of the new *International program* in the School of Pharmaceutical Sciences (undergraduate level). In coordination with other departments and invited foreign faculty, a total of 8 new courses are running since April 2019, contributing to the internationalization of our School and University.

From the point of view of research, we continuously support intramural and extramural groups interested in drug discovery. We also have advanced our own research programs, as demonstrated by the publications of several original studies and review manuscripts, and the participation in national and international conferences. In particular, we would like to highlight

a report published in *J. Int. Cancer*, in which a new pharmacological effect of the anti-cancer drug fulvestrant in oxaliplatin-induced neurodegeneration and mechanical allodynia was discovered in collaboration with the Department of Life Innovation. Separately, in collaboration with researchers at The University of Tokyo, we have revealed a novel interaction mechanism between peptides and antibodies. This work that was recognized with the JB award of the Japanese Biochemical Society.

Overall, these positive developments motivate us to strengthen our research and education efforts even further in the coming year.

■ ■ ■ 臨床薬物治療学分野 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。当研究室は、九州大学病院内の外来診療棟5階に位置する、大学院協力講座です。現在、臨床薬物治療学分野は江頭准教授のご指導の下、医薬品の副作用や臨床の現場で問題となっているテーマに着目しそれらの要因の解明や対策法の確立を目的として研究を行っております。

研究室が薬剤部内に位置しているため、薬剤部の先生方との交流の場も多く、臨床現場からの貴重な情報や意見などを頂くことができるのが最大の特徴です。3年前までは薬学部の学部生が1人も所属していませんでしたが、現在では、6年生2名、5年生2名、4年生3名とにぎやかになってきました。社会人大学院生、留学生を含めて計16名のメンバーで日々過ごしております。また、本分野は国際色豊かなことが特徴で、中国からの3名の学生、アルジェリアからの1名の学生が在籍しており、研究室内では様々な言語が飛び交っております。

当研究室では、これまでに移植後に用いられる免疫抑制薬のタクロリムスおよび種々の抗悪性腫瘍薬の血中濃度や副作用に影響を及ぼす因子の探索を行ってきました。現在では、肝臓、腎臓、造血幹細胞移植領域におけるタクロリムス血中濃度に影響を与える因子、タクロリムス誘発性腎障害、抗悪性腫瘍薬の血中濃度と効果、有害事象に関する研究を行っています。

今後も学部生、留学生、社会人大学院生が一丸となり、臨床現場における課題の解決に向けて邁進したいと思います。

最後になりましたが、卒業生の皆様のご健康とご活躍をお祈りしますとともに、今後も変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

■ ■ ■ 創薬育薬研究施設統括室 ■ ■ ■

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。グリーンファルマ研究所の4階に研究室を構えます創薬育薬研究施設統括室です。当分野は西田教授を筆頭に、西村講師、西山特任助教のご指導のもと、修士1年1名、臨床5年2名、学部4年2名で日々研究に励んでおります。

当分野では、岡崎の自然科学研究機構生理学研究所(生理研)と連携し、心循環恒常性の維持を目的とした新薬開発(創薬)や既承認薬の適応拡大(育薬)を目指した応用研究を積極的に進めております。最近では、抗がん剤やタバコ副流煙により形成されるTRPC3-NOX2複合体が心筋毒性や骨格筋萎縮を引き起こすことを解明し、さらに既承認薬イブジラストがこれを抑制することを発見いたしました。

西田教授は生理研・心循環シグナル研究部門とのクロスアポイントメント教授で、生理研と九大、出張と非常に忙しい中でも熱心なご指導をさせていただきます。西村講師、西山特任助教はご自身の研究を進めながらも学生の指導にご尽力してくださっています。修士1年の後藤さんは自身の研究と就活に向けた活動で忙しくしています。臨床5年の田丸さん、遠山さんは実習で忙しい中、時間を見つけて研究室に来ています。創薬4年の酒田、友清は先生方、先輩方にアドバイスを頂きながら研究を進めています。まだ学生の少ない研究室ではありますが、一人でも多くの学生が配属され、今よりさらに活気ある研究室になっていくのを願うばかりです。

最後になりましたが、卒業生の皆様の益々のご活躍とご発展を心よりお祈り申し上げます。(友清 大樹)



■ ■ ■ 天然物化学分野 ■ ■ ■

平成30年(2018年)8月1日より“天然物化学分野”が時限付き新設分野として開設されました。担当教員は准教授宮本と助教の田中千晶の2名でスタートし、現在は、ポストクのDr. Ponou(松前国際財団の支援でカメ

ルーンDschang大学から来学)、DC3のSakanさん(タイチュラロンコン大学と九州大学の交換留学生として来学)、DC1の友利さん(社会人博士後期課程、株式会社サウスプロダクトCOO)の総勢5名で天然物化学研究を行っています。天然物化学分野は旧植物薬品化学教室、旧医薬資源探索学分野の流れをくむ研究室です。研究室は1号館4階1413号室と1418号室です。“植化”、“探索”卒業生の皆様、お近くにお越しの際は、是非、研究室にお越しください(時限内に)。

追伸:令和2年2月29日(土)に研究室設立記念祝賀会を行います。詳しくは、宮本まで。

■ ■ ■ 創薬腫瘍科学講座 ■ ■ ■

皆様いかがお過ごしでしょうか。

私共の創薬腫瘍科学講座は平成19年5月に開講して以来、早13年目となりました。現在の教室員は特任教授1名、准教授1名、特任助教1名、共同研究員2名の総勢5名ですが、毎日懸命に研究に励んでおります。小野先生は論文作成や実験指導、授業、国内外の学会活動に多忙な毎日を送っております。今年度より特任助教となりました柴田君は、より一層精力的に研究に取り組んでおり、自身の研究をどんどん論文や学会などで発表を行っております。また共同研究員の村上先生と伊藤先生も昼夜を問わず研究に励んでおり、伊藤先生の研究は11月にCancer Researchへとアクセプトされました。

創薬腫瘍科学講座の研究の目標は、ベンチでの成果をがん患者に反映させる基礎臨床融合の研究連携体制のもとに研究を発展させることです。現在、がんの悪性進展に関与する標的分子を“がん微小環境を構成する非がん細胞”と“がん細胞自身”の両方に注目して研究を行っています。すなわち、がんの悪性進展や薬剤耐性に関与するメカニズムを明らかにしながら、独自の標的分子や標的細胞を明らかにすることでがん治療に貢献することを目指して研究を推進しております。さらにはがん悪性進展に関する我々の分子腫瘍学研究に加えて、分子病理学や臨床腫瘍学、さらにバイオ統計学の研究分野と協力して臨床的に有用性のある標的分子を同定して創薬へ結び付けていくところが、私共のがん創薬研究の大きな特徴です。

現在これまで継続して行ってきた研究が、学内や他研究施設、製薬会社などとの共同研究へと発展し、大きく実を結びつつあります。どうぞこれからも、皆様方からの“創薬腫瘍科学講座”へのご支援とご指導を宜しくお祈り申し上げます。

叙位・叙勲

加藤敬太郎先生（故）
 : 「正四位瑞宝中綬章」（平成31年4月2日）
 : 名誉教授 元薬学部長
 井本泰司先生
 : 「瑞宝中綬章」（令和元年5月21日）
 : 名誉教授

受賞

教員

大嶋孝志（環境調和創薬化学）：Asian Core Program/Advanced Research Network Lectureship Award (China) The 13th International Conference on Cutting-Edge Organic Chemistry in Asia (ICCEOCA-13) 2018/11/13 Catalytic Chemoselective Cross-Enolate Coupling Reaction via a Transient Homo-Coupling Dimer

森本浩之（環境調和創薬化学）：平成30年度有機合成化学協会九州山口支部優秀論文賞 2018/11/16 8-アミノキノリンアミドの触媒的化学選択的直加アルコール分解反応の開発

大嶋孝志（環境調和創薬化学）：平成30年度有機合成化学協会企業冠賞（日産化学・有機合成新反応／手法賞）2018/12/17 官能基標的触媒による化学選択性の触媒制御を基盤とする複雑系分子の直接的変換反応の開発

仲矢道雄（薬効安全性学）：第7回万有医学奨励賞 2018/12/17 心肥大時における死細胞除去の分子メカニズムの解明

野田百美（病態生理学）：Outstanding Research Achievement and Contribution to ICBMS 2019 2019/2/3 Cellular mechanism of neuropsychiatric symptom induced by thyroid dysfunction (Keynote Lecture)

白井一晃（薬物分子設計学）：2018年有機合成化学奨励賞 2019/2/14 ヘリセンの螺旋構造内部空間に着目した機能性分子の創製研究

森本浩之（環境調和創薬化学）：日本化学会第33回若い世代の特別講演会（第99春季年会（2019）2019/3/17 四置換炭素を有する含窒素化合物の環境調和型新規合成手法の開発

尾崎省吾（分子生物薬学）：平成31年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 若手科学者賞 2019/4/9 細菌増殖を制御する細胞内シグナリングに関する基盤研究

柴田智博（創薬腫瘍科学）：第23回日本がん分子標的治療学会学術集会 優秀ポスター賞 2019/6/14 Y-box binding protein YB-1活性化シグナルを標的とした乳癌の内分泌治療耐性の新規克服治療

進藤直哉（創薬ケミカルバイオロジー）：EFMC-ASMC '19 Best Poster Prize 2019/9/5 Selective and reversible modification of kinase cysteines with chlorofluoroacetamides

西山和宏（創薬育薬研究施設統括室）：2019-2020年度 日

本獣医学会 獣医学奨励賞 2019/9/11 多因子に着目した消化管運動機能に関わる新規調節機構の解明

野田百美（病態生理学）：International Top Scholar Lecture Program: Invited Scholar Graduate School, Xi'an Jiaotong University 2019/9/24 Physiology and Pathophysiology in the Central Nervous System

宮内 優（細胞生物薬学）：令和元年度内外環境応答・代謝酵素研究会 若手研究者優秀表賞 2019/9/22 UDP-グルクロン酸転移酵素との相互作用によるシトクロムP450 3A活性の抑制

白鳥美穂（ライフイノベーション）：第48回内藤コンファレンス ポスター賞 2019/10/11 Mechanism underlying STAT3 activation in astrocytes under chronic itch conditions

進藤直哉（創薬ケミカルバイオロジー）：有機合成化学協会九州山口支部優秀論文賞 2019/10/23 Selective and reversible modification of kinase cysteines with chlorofluoroacetamides

学生

齋藤耕太（院生修士1年）（生命物理化学）：第57回電子スピンスイエンズ学会 優秀ポスター賞 2018/11/1 脂質過酸化反応における抗酸化物質の作用点および反応機構解明

山根拓哉（院生修士2年）（ライフイノベーション）：第71回日本薬理学会西南部会 優秀発表賞 2018/11/17 ACSA2抗体を用いた脊髄アストロサイト単離法の確立

日高 悠（院生修士1年）（薬物分子設計学）：第35回日本薬学会九州支部大会 優秀発表賞 2018/11/17 分子間カップリングを基盤とする炭素連結型糖脂質アナログの合成研究

阿部雅史（院生修士1年）（生命物理化学）：第35回日本薬学会九州支部大会 優秀発表賞 2018/11/17 酸化脂質由来アルデヒド化合物の体系的解析法の開発

笹木 泉（院生修士1年）（ライフイノベーション）：第35回日本薬学会九州支部大会 優秀発表賞 2018/11/17 アドレナリン受容体を介したミクログリアの炎症応答調節

森崎一宏（院生博士3年2017/3修了）（環境調和創薬化学）：第35回井上研究奨励賞（博士論文に対する賞）2018/12/17 a位四置換炭素含有アミン類の環境調和型合成法の開発

新山哲士（院生修士1年）（病態生理学）：International Conference on Biology and Medical Sciences (ICBMS 2019) ポスター賞3位 2019/2/3 Changes in glial morphology in the brain and animal behavior in hypothyroidism model mice

石井千晴（院生博士1年）（創薬育薬産学官連携）：35th International Annual Meeting in Pharmaceutical Sciences (IAMPS35) and CU-MPU International Collaborative Research Conference, Oral Presentation Award 2019/3/8 Determination of D-amino acids in fermented

products using an automated two-dimensional HPLC-MS/MS system

高橋美帆 (院生修士1年) (創薬育産学官連携) : 35th International Annual Meeting in Pharmaceutical Sciences (IAMPS35) and CU-MPU International Collaborative Research Conference, Poster Presentation Award 2019/3/8 Development of a three-dimensional HPLC system for the determination of acidic amino acid enantiomers in human physiological fluids

古賀啓祐 (学振DC2・ポスドク) (ライフイノベーション) : 第92回日本薬理学会年会 優秀発表賞 2019/3/16 脊髄後角アストロサイトの活性化は、接触性皮膚炎モデルマウスにおいて痒み伝達を増強する

廣中貴則 (院生修士2年) (薬効安全性学) : 第92回日本薬理学会年会 学生優秀発表賞 2019/3/14 Smad6を安定化し、BMPシグナルを抑制するユビキチンリガーゼの同定

中武大貴 (院生博士3年) (環境調和創薬化学) : 九州大学学生表彰 (九州大学大学院薬学研究院) 2019/3/20

廣中貴則 (院生修士2年) (薬効安全性学) : 日本薬学会 第139年会 学生優秀発表賞 2019/3/22 Smad6を安定化し、BMPシグナルを抑制するユビキチンリガーゼの同定

齋藤耕太 (院生修士2年) (生命物理化学) : SFRR-Asia 2019 Young Investigator Award 2019/4/6 Inhibitory effects of several anti-oxidants towards lipid peroxidation

田島諒一 (学部生) (ライフイノベーション) : 日本薬学会第139年会 優秀発表賞 2019/4/22 $A\beta$ 線維由来神経障害性アロディニアに関与する脊髄後角第II層神経サブセットの同定

木谷憲昭 (院生博士1年) (薬物分子設計学) : 第29回万有福岡シンポジウム 有機合成化学協会九州大学山口支部ポスター賞 2019/5/25 直接的 α -C-グリコシル化を基盤とした1,6-炭素連結型二糖アナログの合成研究

吉田竜星 (院生修士1年) (分子生物薬学) : 第16回21世紀大腸菌研究会ポスター発表賞 (学部生・博士課程前期) 2019/5/29 核様体タンパク質HUによる大腸菌oriCの二重鎖開裂促進機構の生化学的解析

若杉泰敬 (院生修士1年) (分子生物薬学) : 2019年度日本生化学会九州支部例会優秀ポスター賞 (学部生・大学院生対象) 2019/6/9 有柄細菌カウロバクターにおける染色体複製終結点結合タンパク質の特性解析

徳永啓佑 (院生博士1年) (創薬ケミカルバイオロジー) : 日本ケミカルバイオロジー学会第14回年会 RSCポスター賞 2019/6/12 不可逆阻害剤への応用を目指したひずみ解消型反応基の開発

古庄 仰 (院生博士1年) (創薬育産学官連携) : 48th International Symposium on High-Performance Liquid Phase Separations and Related Techniques, Best Poster Award, 2019/6/19 Three-dimensional chiral HPLC analysis of extraterrestrial amino acids in carbonaceous

chondrites

門田哲弥 (院生修士1年) (環境調和創薬化学) : 第56回化学関連支部合同九州大会 最優秀発表賞 2019/7/13 窒素上無保護ケチミンの新規触媒的直接合成法の開発

長田悠佑 (院生修士1年) (生物有機合成化学) : 第56回化学関連支部合同九州大会最優秀ポスター賞 2019/7/13 8-オキソグアノシンを選択的に認識するデアザプリン人工ヌクレオチドの開発

平山揮一 (院生修士1年) (環境調和創薬化学) : 第56回化学関連支部合同九州大会優秀発表賞 2019/7/13 パラジウム触媒によるマロノニトリルの直接的アルキル化におけるアリルアルコールとアリルアミンの化学選択的求電子的活性化

古庄 仰 (院生博士1年) (創薬育産学官連携) : 日本分析化学会九州支部 九州分析化学奨励賞 2019/7/27 高感度三次元HPLC分析法の開発と腎不全関連キラルアミノ酸の血中含量解析

謝 金玲 (院生博士1年) (創薬育産学官連携) : 日本分析化学会九州支部 九州分析化学若手賞 2019/7/27 Multi-dimensional HPLC determination of lactate and 3-hydroxybutyrate enantiomers and application to human physiological fluids

牟田拓未 (学部生) (臨床育薬学) : 第30回 霧島神経薬理フォーラム 最優秀発表賞 2019/8/19 UPLC-MSによる新規抗てんかん薬の血中濃度一斉測定法の確立

兼久賢章 (院生博士2年) (ライフイノベーション) : 生体機能と創薬シンポジウム2019 優秀ポスター発表賞 2019/8/30慢性搔痒モデルマウスでは脊髄後角GRPR陽性神経への興奮性シナプス入力が増大する

謝 金玲 (院生博士1年) (創薬育産学官連携) : The 4th International Conference of D-Amino Acid Research, Best Presentation Award 2019/9/11 Enantioselective analysis of lactate and 3-hydroxybutyrate in human samples using a selective and stable 3D-HPLC system

石井千晴 (院生博士2年) (創薬育産学官連携) : 30th International Symposium on Pharmaceutical and Biomedical Analysis, Best Poster Award 2019/9/18 Development of a highly selective two-dimensional HPLC-MS/MS system for the screening of intrinsic D-amino acids in human clinical samples

田中津久志 (院生博士1年) (環境調和創薬化学) : 第36回有機合成化学セミナー 優秀ポスター賞 2019/9/19 カルボン酸等価体の触媒的酸化的 α -ベンジル化反応

石井千晴 (院生博士2年) (創薬育産学官連携) : 九州大学女性優秀研究者賞 2019/10/19 遊離およびタンパク質中D-アミノ酸の高選択的一斉分析を可能とする二次元HPLC-MS/MS法開発と生体試料への適用

吉田優哉 (院生博士3年) (薬剤学) : 第13回 次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム 優秀演題賞 2019/10/20 単球に着目した慢性腎臓病時における心臓病態悪化の新規メカニズム解明

ニュース

大戸茂弘教授（薬剤学）知ってニやるほど！ヘルシスト
体内時計 2019/6/2-6/30（TBSテレビ、各日曜日）

大嶋孝志教授（環境調和創薬化学）九州大学「先生の森」
で紹介。

<https://www.kyushu-u.ac.jp/ja/university/professor/oshima.html> 2019/4/2

新聞掲載 ぜんそく薬が抗がん剤の副作用軽減（創薬育
薬研究施設統括室）西日本新聞電子版 2019/9/5

新聞掲載 イブジラストに抗がん剤の副作用（筋萎縮）
軽減効果！（創薬育薬研究施設統括室）日本経済新聞
電子版 2019/9/4

野田百美准教授 産経新聞（山口・九州版）一面広告
第9回日本分子状水素医学生物学会・市民 公開講座の
案内（病態生理学）

九州大学プレスリリース 王子田彰夫教授（創薬ケミカ
ルバイオロジー）抗がん剤の機能を高める新しいドラッ
グデザイン-化学反応で標的タンパク質を高選択的に機能
阻害- 2019/1/15

津田誠教授

内藤記念科学振興財団2018年度研究助成金（特定研究助
成金）に採択（ライフイノベーション）2019/3/19

高露雄太助教

内藤記念科学振興財団2018年度研究助成金（海外研究留
学助成金）に採択（ライフイノベーション）2019/3/19

神経障害性アロディニアに関する総説が掲載。PAIN誌
（ライフイノベーション）2019/4/25

一次求心性神経を介した痒みに関する論文が掲載。J Allergy
Clin Immunol誌（ライフイノベーション）2018/11/17

フルベストラントがオキサリプラチンによる神経障害の
発症を抑えることを明らかにした論文（エコファーマ研
究）が掲載。International Journal of Cancer 誌（グロー
バルヘルスケア）2019/10/15

2018年度JB論文賞 J. Biochem誌に掲載（グローバル
ヘルスケア）2019/9/18

廣中貴則（院生博士1年）「日本薬理学雑誌」掲載（薬
効安全性学）2019/7/1

平成31年度 九州大学大学院薬学府修士課程 奨学特別選抜 入学者一覧

松村 友輝（医薬細胞生化学）	末國 雅貴（医薬細胞生化学）	吉田 竜星（分子生物学薬学）
百木野和也（ライフイノベーション）	藤井 志織（ライフイノベーション）	吉川 優（ライフイノベーション）
山内 智暁（薬剤学）	小俣 裕司（薬剤学）	門田 哲弥（環境調和創薬化学）
辻 汰朗（環境調和創薬化学）		

平成31年度 日本学術振興会 特別研究員 採択者

DC1 堀井 雄真（薬効安全性学）	DC1 古庄 仰（創薬育薬産学官連携）
DC1 近藤 優太（環境調和創薬化学）	DC2 進藤 早紀（生命物理化学）
DC1 田中津久志（環境調和創薬化学）	DC2 石井 千晴（創薬育薬産学官連携）
DC1 吉原 康平（ライフイノベーション）	

（氏名、配属分野は順不同）

令和元年度

九大薬友会 評議員会議事録

【日 時】 令和元年7月13日（土）
12時30分より14時45分まで

【場 所】 九州大学薬学研究院 会議室（中央棟2階）

【出席者】 評議員定数：役員17名、クラス評議員78名の
合計95名（重複5名）出席者数30名、委任状
33名

役 員：家入一郎会長、岩崎正武副会長、永繁晶二新
副会長、山田健一副会長、森元聡監事、麻生

真理子新庶務理事、田中宏幸旧庶務理事、廣
田豪会計理事

支 部 長：松野研司（柴田重信関東支部長代理）、江頭
啓（永繁昌二関西支部長代理）、唐澤博順（福
岡支部長）、淀光昭（長崎支部長）、局伸男（大
分支部長）、魚住太志（鹿児島支部長）

クラス評議員：占部美子、橋本光紀、江森節子、小川建志、
赤司俊博、川原章、古賀信幸、飛松雅代、小
野容子、島添隆雄、大庭義史、菅田哲治、牛
島健太郎、宮内優、轟木亮太

会議に先立ち、九大薬友会会則第19条1項の評議員会の定足数について説明があり、評議員会が成立した事が述べられた。

また、同条2項に基づき本会の議長は会長である事が説明された。

【報告事項】

1. 平成30年度事業報告

資料に基づき平成30年度の事業報告がなされた。

2. 各支部の活動状況

新会長より薬学研究院の最近の状況（国家試験合格率100%、薬学研究院に設置された新分野、人事異動など）について説明がなされた。

各支部長より、関東支部、関西支部、福岡支部、長崎支部、大分支部、鹿児島支部の活動状況や財政状況が報告された。

【議 題】

1. 役員の変更

令和元年度役員、支部長、評議員について資料に基

づき説明がなされ承認された。

新副会長：永繁晶二、新庶務理事：麻生真理子、新評議員：橋本光紀（第13回生）、轟木亮太（創薬4年）、松川莉奈（臨床6年）

2. 平成30年度会計報告

平成30年度の会計報告がなされ、承認された。

3. 令和元年度事業計画（案）

資料に基づき令和元年度事業計画案が説明され、原案のとおり認められた。

4. 令和元年度予算（案）

資料に基づき、令和元年度予算案が説明され、一部修正の後認められた。

5. 薬友会あり方検討会

資料に基づき説明され、以下の事項が確認、決定された。

- ・薬友会ホームページ（Bikita）への登録者数の増加が報告され、今後さらにアクセス数などを増やすため、フォトアルバム、就職情報支援、バナー広告の充実を図る。

九大薬友会会計報告

平成30年度 九大薬友会会計報告

【収入】	
薬友会入会金（6,000円×48口）	288,000円
年会費（3,000円×941口）	2,823,000円
UFJニコスカード（3,000円×61）	168,788円
預金利息	11円
小 計	3,279,799円
平成29年度繰越金	5,176,754円
合 計	8,456,553円
【支出】	
年会費通知発送表	561,956円
球技大会補助費	20,000円
薬友会誌発刊費	502,708円
薬友会名簿発刊費	0円
インターネット同窓会システム利用およびホームページ管理料	194,400円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	773,000円
支部講演会支援金	100,000円
会議費	167,950円
通信・事務用品費	7,325円
金融機関手数料	27,600円
予備費	0円
小 計	2,554,939円
積立残金	5,901,614円
合 計	8,456,553円

九大薬友会予算

令和元年度 九大薬友会予算

【収入】	
薬友会入会金（6,000円×50口）	300,000円
年会費（3,000円×950口）	2,850,000円
UFJニコスカード（3,000円×60）	180,000円
預金利息	10円
小 計	3,330,010円
前年度繰越金	5,901,614円
合 計	9,231,624円
【支出】	
年会費通知発送費	600,000円
球技大会補助費	40,000円
薬友会誌発刊費	500,000円
薬友会名簿発刊費	0円
インターネット同窓会システム利用およびホームページ管理料	200,000円
卒業祝賀会記念補助費	200,000円
支部支援金	800,000円
支部講演会支援金	250,000円
会議費	180,000円
通信・事務用品費	25,000円
金融機関手数料	30,000円
予備費	100,000円
小 計	2,925,000円
積立残金	6,306,624円
合 計	9,231,624円

博士(後期)課程 学位授与者一覽

(H31.3月 ~ R1.10月)

片宗 千春 H31.3.20 博士(創薬科学) 概日時計分子の機能低下による細胞がん化のメカニズムの解析

谷口 紗輝 H31.3.20 博士(創薬科学) Subcellular dynamics of a chromosome partition factor CrfC protein in *Escherichia coli* (大腸菌の染色体分配制御因子CrfCの細胞内動態)

菊田 健司 H31.3.20 博士(創薬科学) RNA部位特異的な修飾能をもつ人工核酸の創製と核酸構造および機能制御への応用

中武 大貴 H31.3.20 博士(創薬科学) 低級エステル化合物を原料とした環境調和型化学反応の開発

王 磊 H31.3.20 博士(創薬科学) Development of artificial nucleic acids to selectively recognize CG inversion site for the triplex DNA formation and its antigene application to efficient inhibition of hTERT gene (3本鎖DNA形成を目指したCG障害部位を選択的に認識する人工核酸の開発と遺伝子の発現を効率的に阻害するアンチジーン法への展開)

馬場 裕子 H31.3.2 博士(創薬科学) 新規化合物の初期臨床開発におけるModel Informed Drug Discovery & Developmentの実践に関する研究

松田 翔一 H31.3.20 博士(創薬科学) 心疾患時に生じる筋線維芽細胞の新たな機能に関する研究

田島 諒一 H31.3.20 博士(創薬科学) A β 線維由来神経障害性アロディニアに関与する脊髄後角表層神経サブセットの特定

末次 王卓 H31.3.20 博士(臨床薬学) 造血幹細胞移植後のタクロリムス個別化投与設計に向けた臨床情報・遺伝子多型情報の有用性解明に関する研究

江口 里加 H31.3.20 博士(臨床薬学) 統合失調症の共変量としての増悪因子に関する解析

鶴田 朗人 H31.3.20 博士(臨床薬学) 新規抗炎症化合物の作用機序解明に関する研究

鶴留 優也 H31.3.20 博士(臨床薬学) 足場タンパク質NHERF1に着目したトランスポーターの細胞膜局在における概日リズム制御機構の解析

大場 悠生 H31.3.20 博士(創薬科学) Smad6のタンパク質量制御機構の解明

山川 裕介 H31.3.20 博士(臨床薬学) 体内時計機構におけるcholecystokinin-1受容体の関与

原 幸稔 R1.5.31 博士(臨床薬学) Aldehyde dehydrogenase活性を指標とした悪性乳がんに対する時間薬理学的研究

伊東惣一郎 R1.8.31 博士(創薬科学) 日本人健康成人におけるCathepsin Aの遺伝子多型解析と発現量及び代謝活性への影響評価

浪崎 博史 R1.8.31 博士(創薬科学) ヒトIgG4抗体の安定化に関する研究 (Study on stabilization of human IgG4 antibodies)

徳田 和雄 R1.9.25 博士(創薬科学) ラットにおけるマキサカルシトールの体内動態に関する研究

辛 海龍 R1.10.31 博士(創薬科学) Development of Unactivated Bond Cleavage and Its Application for the Removal of Directing Groups (不活性結合切断反応の開発と配向基除去への応用)

人事異動

異動日	所属	異動内容	氏名	職名	異動前の職業又は異動後の職業
平成31年3月31日	生薬学分野	退職	田中宏幸	准教授	山陽小野田市立山口東京理科大学教授
平成31年3月31日	薬物分子設計学分野	退職	臼井一晃	助教	昭和薬科大学講師
平成31年3月31日	分子生物薬学分野	退職	川上広宣	助教	山陽小野田市立山口東京理科大学准教授
平成31年4月1日	グローバルファーマシー分野	採用	近藤裕郷	教授	国立研究開発法人医薬基盤・健康・栄養研究所 医薬基盤研究所長 兼創薬デザイン研究センター長・クロスアポイントメント制度適用
平成31年4月1日	分子生物薬学分野	採用	永田麻梨子	助教	日本学術振興会特別研究員
平成31年4月1日	薬物分子設計学分野	採用	寄立麻琴	助教	カリフォルニア大学バークレー校 博士研究員
令和1年6月1日	グローバルファーマシー分野	採用	川西英治	特任講師	田辺三菱製薬株式会社 創薬本部フロンティア創薬ユニット 主席研究員・クロスアポイントメント 制度適用
令和1年6月30日	ライフイノベーション分野	退職	高露雄太	助教	University of Calgary / Visiting researcher
令和1年10月1日	グローバルファーマシー分野	採用	川西英治	講師	九州大学大学院薬学研究院 グローバルファーマシー分野 特任講師・クロスアポイントメント制 度適用

同窓会公式ホームページのご案内

会員同士のコミュニケーションの場となるSNS形式のホームページです。



母校・同窓会の情報が満載!

<https://www.bikita.jp>

会員限定の記事をご覧になりたい方は年会費振込用紙に記載されたID・PASSを入力し、会員登録してください。

PCから

九大薬友会 Bikita 検索

スマートフォンから



九大薬友会

News

事務局からのお知らせ

2019年07月03日 薬友会

2019年度九大薬友会報東文...

2019年03月13日 こうやま (koyabu)

九大薬友会関東支部会員の皆様

九州大学薬学部 在校生 ...

令和元年度 九大薬友会年会費納入のお願いについて (Pick up)

九大薬友会会員の皆様におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。さて、九大薬友会では平成9年度より毎年3,000円の年会費を会員（名譽会員、在校生を除く）の方に納入いただいております。

重要なお知らせ

2019年10月23日 令和元年度 九大薬友会年会費納入のお願いについて

2019年09月05日 よか薬会 (九大薬友会福岡支部) 幹会・康薬会・豊続会

住所変更

転勤・引っ越し・結婚などで住所やお名前に変更がある場合はセキュリティフォームメールからお知らせください。

バックナンバー

薬友会誌、評議員会議事録のバックナンバーを電子化し掲載しています。

ID発行申請

ID・パスワードが分からない場合はこちらからお問い合わせください。

バナー広告募集中

企業HPなどへのリンクを貼り付けられます。詳しくはお問い合わせください。

※同窓会コミュニティサイトBikitaは小野高速印刷(株)が運営管理し、薬友会事務局と正式に利用契約を結んでいます。会員のご利用は全て無料です。(通信料は利用者負担です。)



編集後記

薬友会の皆様いかがお過ごしでしょうか。この度は令和最初の薬友会誌作成でしたが、卒業生の方々、薬学研究院教員、在校生、それぞれの近況、活躍をお届けすることができました。懐かしく、微笑ましく、頼もしく、様々な思いで読んでいただけたのではないかと存じます。執筆いただいた皆様方、またご協力いただいた薬学研究院各分野の先生方ならびに職員の方々、薬友会各支部の方々にご礼申し上げます。

令和の時代での更なる躍進を目指し、薬学研究院教員・学生は教育、研究に取り組んで参ります。その様子は薬学部ホームページでもご覧ください。また、九大薬友会のホームページ (Bikita) では、会員の皆様への情報をご提供しております。是非ログインして頂き、同窓会などコミュニティの場としてもご利用下さい。(https://www.bikita.jp/class/index.php?cl=f029e7) また、皆様方からのご意見・ご要望を頂ければ幸いです。

最後になりましたが、今後も薬学研究院、薬友会への変わらぬご支援をよろしく申し上げますとともに、会員の皆様方のさらなるご健勝とご発展をお祈り申し上げます。

(庶務理事：麻生真理子)